

不斷有がたき御法を聞し其功力此身ハ非情の果を連れ今人界に生を受る又一木の柳ハ是女身を受し縁によつて互の中をさかれし恨長く非情の果を離す一念仇を報ふべしよくく慎登山有我人界に生するも法味を受し恩有べ告しらしむといふ聲斗形ハ消て心中の魂と現ハれ大空より飛去しこそ「ふしきあれ此魂則中有よ留つて常陸の國の片邊に横曾根の平太郎と生るとかや閑然として王坊ハ奇異の思ひをあしめたる誠や女身を受たりし柳の見入強かりけん今の奇特を見るからに王坊忽慢心起て折よふしきや正しくも非情の柳の木人と成斯迄詞をかへす事法の力と云あがら多年の功力に寄すんばいかでかゝる奇瑞を見ん凡山修行の人幾万人か有べきが九十九度迄恙あく難行せしめ我斗遁身に取て譽やと獨笑して居たりける時よ山鳴震動して其さま異形の客僧忽然と顯れ出ヤア穢ハシや王坊非情の精をけぞしつるを

我行徳と思ふ慢心まんじんいまへしや勿駄むだあや、さばかり垢穢くびきたる惡念にて此山上へ叶ふまじ急いで下山致すべしと、はつたと睨眼のぞまなこの光り輝渡つて恐ろし、され共王坊魔生まうじゆの心入かればちつ、共ざいざせすいかに御身誰人あればさいふぞ、我受戒灌頂じゅげんとうせしより來六塵ろくじんの境きやうを去て、六根清淨さやうと聖切ひじきたる此行者、百度の荒行あらゆきを勧し我心を穢よがれたるとハヤ過言ごごん千万と信ずる氣色けしきあらばこそ客僧きやくそういかつて僻せひく出まじきかう思ひ志らせんといふも早く飛かゝり引摺ひだらで投げればさばかり深き谷底ふふねへ真倒まつまかさまに落るを見へしが柳の梢すゑ貫つらぬかれ、骸からだハ朱あけに死たりし劔樹地獄けんじゆぢごくの目の前へ是は一念の慢心まんじん、天魔破旬まほせんの心にかかり、願望空わがむなしく果せしは思るべし、され共日頃の行徳にや、王坊の尸しかばねも溼しみたる一つの玉精たませい、愴むなとしてこくうに入ば、是はも流轉りうてんに出生す、後三條院第一の皇子、白川の法皇こそ彼蓮花王坊かのうが再來たり、代かたり既は星移ほきうてしやば往來わうらいの物

三十三間堂

語、昔々ハ「斯」とある。

三十三間堂 平太郎縁起 祇園女御九重錦

作 者 中邑笛躬

若 阿契

枝葉美ある物、根莖を害ひ世に全き事、固あしと云傳へたる語の事と
人ハ万物の靈として忠讒賢否交起、草木非情の産として統て德化の
風よ靡き治る時、津秋津國、鳥羽院の傍字にあたつて、萬機の系も白川の
法皇とヤ奉るハチヨシ聖徳いみじき仙洞あり、此君の願の旨有て祇園大社
に恭籠ある賽の車道警蹕正しくは車の先、時の攝政右大臣、師實公殿に
ハ太宰帥藤原朝臣季仲、押さがつて北面の守護武者所時澄各衣冠岌然
と供奉の官人仕丁迄位爭ふ下馬石もおのれと跼む威勢、かゝる所へ
鳥居前奏問、くと呼ひつて立出來るハ備前守平忠盛跡に續て譜代の
執權進の藏人家貞大の男を高手小手、いよしめ嚴しく引居れバ攝政師

實いぶかり給ひ心得ざる振廻かあ様子いかにと有けれど忠盛兩袖
刷ひさんひ其曲者昨夜社内に忍び入神殿近く狙ひ寄形相尋常あらざ
れば某生捕しと事もあげある演説に師實大きに驚給ひ見れば怪しき
沙門の出立面を改め子細をとへし藏人との給へばはつと答へて立か
かり麥藁笠を引たくれバ内匠頭源義親へ、ヤコハそもいかある斗ひと
攝政始並居る人ゝ鞠果たる斗りあり始終呑込武者所太宰師と顔見合
せ工の牋の合ぬ同士手持不沙汰み義親の繩ときほぞけバ師實公御聲
高くさいかに義親法皇當社又參籠有事京童も能知たり然るに怪しき
僧形にて神殿ちかく窺ひ寄心底甚いぶかしと問せ給へば嘲笑ひ
とがましき少さつと某かゝる出立へ君を守護するかげの奉公尤忠盛
進藏人宿直致すと聞つれ共夜の間の油斷覺束よく皇居を守る我忠節
夫共志らぬ不覺の忠盛わざと繩目にかゝつたを手柄額ある言上へ片

腹いたしと欺つてよへみを見せぬへらず口^ア過言之義親誠我君を守^ル
護する身が何故我に眞劔の勝負有し心得ずとのつびきあらぬ詞の
先季仲引取^アこれ忠盛君を守護する身の要害及物帶せで済べきか何
角^アとおいやる貴公でも其通り腰刀、邊武門に產れても手前の見へぬ
猪武者と罵る中^ア進藏人たより兼てつゝと出^ア季仲の意共覺へず
主人の太刀と義親の刃物を一所^ア論ずる事愚ある眼力と詞の釘を
折返せバ脇よりぬつと武者所^アちよこざいあ指出口、こま言いはずす
つこんで似合ふた様に車の牛の番せよ藏人といはせを果す^シ奇怪
其聰切て切さげんとつゝ立上る家貞をヤン早まるも忠盛卿、せいしと
をめてこあたに向ひ^ア義親とつくと聞れよ某^ア帶する此太刀ハ君を守^ル
護する誠の太刀、又貴殿の打物ハ上を恐れぬ眞劔あれバ亭がら荆も同
然と嘲嘆あれバ怒^アをまし^ア得手勝手聞にくい此義親が一腰ハ武士た

る者の魂あるを、亭がらあんせゝさみするに聞捨がたしと譜寄バ忠盛
につと打笑ひ、成程及物ハ武士の魂然りといへ共、一天の君を守護する
魂ハ真此通りと拔放すハ、眞鋤あらぬ木刀一振追取直して詞を重此木
刀を帶せしハ過し節會の折から、忠義一途の及金を鍊物其數にハあ
らかねの刃を頼まぬ我魂、よく見られよと指付る木刀一本さしもの義
親何と返答、口でもる太宰師ハ差心得^{イマサ}忠盛、廣言置れい、夫程立派^{ヨツハ}有魂
持、シ此扇^{ハタ}と取出し、是に書たる戀歌の取やり、察する所官女の内、不義効
いてお樂^{ハジメ}しみ、徒^{スリヤ}も軍用に立ヤか、と押開く扇の面ハ覺の手跡^{シロサカ}、木石^{キシ}あ
らぬ忠盛が心の外の戀歌の手誂^{ハツ}はつと斗^{コト}と斗^{コト}と指うつむき誤り入たる風
情あり、折しも車の添玉簾^{タテヨドレ}さつとかゝけて白川の法皇祇園女御と諸共
に、玉座列ある綾錦^{リョウシキ}さも貴ある粧^{ヨコモ}に、諸卿も式禮厚額笏^{シヨウルイフク}を正して尊敬有
法星振たる湧聲にて、今聞所の詞争^{ハラセ}ひ互に越度^{オバセ}ハ有るがらさして答る

譯あらす、或夜是成女御が袖引ひやたけの武士と見留置たる其様子女
御委しく物語れど仰の内に薄紅粉の恥てもみでる緋の榜ばかまや忠盛殿
其夜袖つま引給ふゝよし有人と見受しかば燈の油煙檜扇にうつし取
たるかゝり地に楊枝の先の石摺を思ひ付たる歌一首、御手にあらば其
由をあかして誠武士の身の潔白を見せ玉へと事を分たる女御の仰忠盛具
に領掌有斯顯岡かられし上からい何をか包アベキ、其折給へる歌の返し、有
合扇記書認め、奥に相圖の鈴の緒よ結び付たる心の迷ひ、直に餘人の手
に入しは是忠盛が身の誠幸君の檀扇たんせんハ折から懷中致せり、と指出す扇
前實公、取て捧る車の内、法皇ぼうおうつくづく観有覺束くわいじゆくあ、誰仙山の人ぞとよ、此
これに引主を乞はずや、と吟じ給へば太宰帥おほさし、折こそよしと進出持たる
扇取直し、雲間くもま、只洩はなきぬる月あれど、おぼろけみてはいいじとぞ思ふ
ア此上かみハ不義明白、不所存者の平忠盛さつしと糺明遊かうめい遊バセよと扇さし上

奏されば法皇肯じ給へずして、いやとよさにあらず、忠盛が手づさみへ
我敷島の道に入心やさしき扇の面神祇釋教戀無常皆是歌の種あれど
沙門の身にて思ふ懸忍ぶ懸路を詠習ひ、忠盛戀歌を詠だりとて不義と
咎る事あられ又義親が帶鉄も武士たる者の身の守是も野心と思へれ
ず、只此上へ先非を捨互に忠ある心を合せ、都の政務肝要どや、朕兼々三
熊野の大櫻現を信ずれば、車を運ん其爲よ、則當社へ涉暇の法施をさ
げ通夜をあし、是る熊野へ赴バ常の誓固の忠盛時澄洛中守護内匠頭
必怠る事あられど、仰も翠簾もやすらかに事を納る勅り皆々偈仰嚴に
立上つたる太宰帥時澄諸共義親を麥藁笠に邪を覆ひ隠して墨衣すま
ぬ誼義も方寸の胸にからむる智仁勇平忠盛藏人も禮義乱さず立茂る
神の菌生み善惡の道明らけき攝政補佐懷治まる君が代の例を爰よ、ひ
輦引わかれぞ行雲の前の世の契りを爰に、三熊野の谷の岸根に生茂

る柳が本の休床女主の作姿、赤前垂の色にめで、後生善所へ此茶屋の端
香に足を留伽羅のかほりも細き、柳腰ふ柳くと名も高し、爰へのかく
出くるゝ小山のごとき大の男、名ハ岩淵の和田四郎山賊夜盜の鷦眼、き
よろくそこら見廻して、^開ナントお柳、けふへ道者も多かつたで、ゑらふ取た
で有ふのと、腰打かくれバ、エイナ、あんば通りがえげうてもお足の留る事
でござんせぬ、何亥や旅人の足を口合にお足とへあまの事か、天窓敷
斗で高の知たつまみ錢、そんあそろい事せふより、此の鼻と妹脊のかた
らひする氣のあいか、大勢の百姓共よ、這かいまし、お家様の奥様のと敬
す、^{ヨリヤ}命取りとしあだれかゝれバ、あめそんあ事ハ嫌ひでござんす、何
じや嫌ひじや、わしや好じやといふ女のあい、娘斗大事にかけ蝮
に見入られ、ゑらい目よかあ、笑止あ事、互よ女あし夫あし、いつぞとへ思
ふてゐた、^{ヨシ}手付のかふじやと抱付べうるさあがらも上手者、夫程思ふ

て下さんすを、何のいあといあ舟の、二世も三世もからぬと、固の盃
おた上で、やく夫へ近頃忝いじやが酒や肴が有共く爰に待て居やし
やんせつめ拵てくるへいあと言捨庵へつゝと入いかぬおせゝおとゝ
ひごんせと戸をびつしやり、あむ三寶取おつたにつくい奴じやと睨で
見たがこつちが悪い、此山中にたつた獨暮して居る大膽女良、あら立て
れいかぬ筈、爰らが戀の辛抱じやど立すぐばつた虫腹のてつべい押さ
へる折も折、岩淵それにお居やるかと問近く來るへ武者所時澄鼻と鼻
とを突合せ、何事も先達てゆ合せし通、法皇を擒にし祇園女郎を奪捕、太
宰師季仲卿の戀を叶へる手段といふも、第一へ忠盛から仕廻ふてとら
でり、何かの邪魔、隨分油斷あき様にと、季仲卿の印、五十兩受取れよ
と手に渡せば、押戴て何が扱某も鹿島三郎義連といふ名を包とくお都
を逐電し、顔見しらぬが幸究竟殊に身が主人義親、季仲殿に同心のよし

満足く、軍用金用意の爲かやうに形を略した幸、忠盛を討放し女房を奪ふて手に入んちつ共氣つかひあと、しめし合する畠傳ひ山踏分る小鳥狩鷹匠犬引列卒の者、大勢引連出来る太宰師季仲、其生れ付黒ければ黒師と異名に呼れ髭の塵取武者所岩淵を引合せ、手を挿て蹲季仲桓桓と見廻し、和田四郎聞及ぶ早速の合駄珍重く、此度法皇が迎に登山せしが、陸路を下向といふにより、某ハ早歸洛の次手小鳥を狩せ、遊覽せん爲斯のごとく出立たり、ア和田四郎迎の船ハ新宮の濱又残し置、女湯を奪ふて合点か、ア仰迄もいはず法皇下向又極れバ旁油斷成かたし手下の者に告しらせ所々に待伏せん、心しづかよ涉歸京と追蹤たらく、岩淵ハ住家をさして立歸る、跡にハ季仲四方又眼を付見上る岸の木の間も、夫と白鷺羽をのして飛來る風情ア時澄、大鷹にかけさせよ、はつと拳を放すやいあ鷺を追かけ廻し何の苦もなく引摑飛歸らんと志た

りしが梢遙に乱れたる、柳が枝に足繩かゝり、羽たゝきしたる其隙又鶯
の遁れて飛去たり、季仲驚あれを見よ、某が秘藏の薄雲、早と足繩切すん
ば暫時が間に狂ひ死^{ノア}く者共、稍に登て助よ、といへとあせれと遙の梢
あれよく、といふ計、誰^の登らんといふ者あし、時澄いらつて云かひあし
所詮柳を切倒^{たお}し、鷹を助るより外へあし、近邊をかけ廻り、柵を呼寄切崩
せど、季仲諸共下知すれば畏つて列卒の者皆我先と走行爰に常陸の國
の片邊に、横曾根の平太郎當吉といふ者有、先年父を不慮に討れ敵の有
家知されば、熊野權現に祈誓を籠^{こも}せ、母を老の坂、孝行深き谷道の崖を
傳^{はなび}み來りしが斯^かを見るより傍^{かた}に母をおろし置、季仲が傍近く、道すがら
聞しに違はず見ゆせば、梢と云鷹の命も危ければ、心せきに渉尤併^{はから}かほ
との大木切萌さんとの渉斗ひ、憚りあがら殺生かと存るといへせも立
ず季仲^{ノア}、何やつあれば無用の留達、生有鷹を助ん爲、非情の柳を切取事、

殺生とい何を以て、ちよこざい千万すされやつと睨付る平太郎猶進寄
されば草木心あしといナセ共花實春秋の時を違ず、陽春の徳を以て、南
枝花始て開とす。彼釋尊の入滅にハ叢林の諸木忽枯し其例、其外飛梅老
松いづれも心ある事ハ人間にかへらねば、殺生とすたに解言ハひまじ
御家來の内射藝鍛練の方に仰弓矢を以て足繩を射切せ給ハレ、鳥も助
り柳も恙あくひんと事もあげにぞやける。夫を臂にあらひふか
恐らく養由比衛が拳ハしらず叶ハぬ事及バぬ事、すつ込すされど嘲る
内老母聞兼進出、御家來の内射人があくば、此盼御覽のごとく賤しき士
民の手業あがら、常弓矢を心がくれば、足繩ハよも射兼まじ、仰付られ
下されよ、と願へば時澄せ、ら笑ひ、射藝鍛練の某さへいかいと思
ふて扣へしに順禮道者の分際あまちよこざいと思へ共望あら射させ
てやると弓と矢渡せば平太郎おめる色あく身縕ひ梢遙にねらひをか

ため、さりくと引しほり切て放せばあやまたす、足繩ふつつと射切たり、塵い悦ぶ其風情羽たゝき打て飛歸り、拳に翅つばさを休る有様、扱も名人射たりやと嘗し、鳴も止ざりけり。老女おとめ嬉しさ飛立思ひ出か志やつたく、うや御らうじたか、順禮道者の分際ざいでも見事射的課かはせましたぞやと、母が自慢じまんの先折時澄時澄、犬の蚤のぶの噛かみあて、時の拍子で射切たれ、辻放下辻のほど轉業誠武士の弓勢のじにて、敵を遠矢に射て落すを肝要かんようといふいよいい禁庭きていの武者所、此時澄が弓勢のじにて、先年横曾根次官光當まさといふ者、加茂の競馬さかばの折から射藝じげいの論ろんも未熟みじゅくの光當、某が放つ矢の、胸板を射留たりと語る中なかよ驚く母、我子が一腰拔放ぬきだし夫の敵のぞを切付きつるをよしと、平太郎ひらたろう其手にすがり留とどめられ、放はなせくと親子が争あらそひ、時澄眉に皺しわを寄せ、何ぞく、扱あへ身が手てみかけた、次官光當まさが所縁ゆゑの者で有しよあと切及廻せば平太郎ひらたろう、う左様さうある者で、はさらくあし、是成なれ我等われらが母ふくと

正氣を失へば、これ／＼どこも正氣を失ふた、そぶかつしや
るが則氣違ひ、まだいの、サアく其氣違ひを、直さん爲、夫故に本宮の湯、
治み參つた、一廻りで、ハ直らぬ筈、何事も私次第に、サアく必何もおつしや
んあと、刀を鞘み指寄て、とかく本性で、あいから慮外の段ハ御宥免む詫
ウと手をつけ、バ、いか様目の内のかよろ付ハ、氣違ひに極つた、必及物
を持するあと時澄が納得み季仲を立上り、御邊ハ今を合點か、岩淵共
云合せ、忠盛タツマサ打殺した其跡で、戀を叶へて首尾よふと、目と目でしら
す横車坂口迄と時澄が追付吉左右仕らんミサシ待ぞと季仲ハ都をさして
別れ行跡を遙に打詠め残り多びに立上る、母が手先もふるひ聲ヨリヤ平太
郎あぜとめた、廻り逢た夫の歟、いで追かけてと行先に、サアくお待下され
と留る腕をふり放し、有合杖ツケを追取のベ、背骨鶴用捨ハシカニサキヨウシヤ打すへく息イキ
をつぎセア爰あ比興者、年來の親の歟我と名乗て顯へしたハ、權現様の御

手引有がたしと思へりあ、母を先へ飛かしり一かせ成共討べきよ、まん
そくあ此母迄氣違にしたひ何の爲よふのめくと逃したあ、憶病者大
腰ぬけ憎やく腹立やと身を震へして無念泣、平太郎も諸共々むせぶ
涙を押拭ひ、段々の御腹立御怒の御尤、あらぬ事をや上おどりめゆた平
太郎、いつかあふくれへ致しませぬ、供に天を戴ざるハ父の歟、夫ぞと名
乗た其時、飛立斗の我胸中おめく、此場をかへせしハ御覽のごとく
ア大勢、何程手しげく働く共叶へね時へ返り討、死する命の惜からぬぞ
某が相果あべ、や誰か殘つて育ませふ、とあつて討ねバ父への不孝、二ツ
の道に迷ひしが、面頬名苗字知る上へ重て討べき時節もと、寶の山へ入
あがら是非あく歎を、助しそやまだ其上に勿躰あり、母人を狂氣にせし
御怒をしづめられ、平太郎が心の無念させつあさを、御推量下されど宥
つ詫つ手を合せ誤る、も又涙ある母も始終を聞に付、尤へ去あがら、そあ

に限りよもやよも、比興未練の心へあい筆者の一途に跡先をく打擲
したの母が誤り鹿忽で有た、堪忍してたもこらへてたも、どこも瘤うぶへせ
あんだか、冥加あき御仰、只今の御杖の跡體に痛を覺ぬ、次第につも
る浮鬱浮手の力もおのづから、年の上の加減かと、思へば悲しうござり
ます、やゝ今打擲した其杖の身にこたへぬが悲しいとや、親がいふ無財
の杖、世に我子を折檻し、意見の爲の打擲をかへつて恨る者も有、母が
力の弱りしを惜悲しむ孝行が、又と類たぐひもありかいの宿世いかある界境
を貧苦をさするかへいやと親子手てみ手てを取かへし互わがみ詫つ詫らるゝ涙
の雨の時あらぬ、時雨ときみ袖やぬらすらん、かゝる歎き立聞し、お柳の心汲
端香、茶碗持手もかもはゆくしづく傍そば立寄て、やか二人櫻殘らず
櫻子へ聞ました、扱もくおいとしや、取分旅たびつらい物私わたくしが臥所おとこ此
處ところまへらに有あがら暫くあれにてお休有、獨住ひとりすみの事あれば必遠慮そんりよ

傍無用ぞと奥底もあき饗に母の悦び、是へア様子を聞たと有からへ包
隠そふ様もあり、お詞又あまへまし然らばお世話よ、何のいあ、一河田
流谷の水茶を入かへて馳走せん。サクこちへと手を引いていたへり庵へ
伴ひ行跡をつくべ平太郎同 扱も行先に鬼のあいとの世上の譬たとへか
るけへしき山中にも、やさしき人ひともあれば有、まだ年若あ身を以て、何故
の獨住ひきすむ玄はらしやと獨言思ひつくほの鍋なべあらで茶酌しゃくの名よし深縁ふかぶ縁
柳が本の肘枕夢に、うさをやはらしけり、春風に、糸よりかけて白露の、玉
にもぬける青柳の、二世の紺にひかれくる、お柳へ遙見廻して、おづく
傍へ寄あがら何と岩もる露重しづく、旅のか方かたやくと音すれば悔り
して起直り、是へくお女中様母の介抱かいはうお世話の段々添そそ、笑止せきし、そり
や、何の事じやいあ、いやくきつとお禮をうさにやあらぬ旅の道
連世の情とやせ共取分ああたにれどふしたは縁か廻り合、心迄がゆり

たやら、寝る共あしにつぬとろく、無禮の傍観と手をつけば、お柳もふ
つと會釋して是へしたり其様にお禮に及ぶかいあ、母後様にもお勞^{つかれ}
ら、今すやくとる點^{しづき}が、う扱^{いぢき}へ寝入られましたかあ、嬉しやく添い、是
とゆも一樹のかげ、何ぞのほ縁でござりませふ、サイナヤ、其ほ縁記付まして
問^きましたい事がござんする、夫へ何でか、ザア外の事でもござんせぬ
アノナか前様にハ、ア内儀様がござんすかベニア是へ改^{あらわ}まつたか尋でござ
りますが、内儀様へまだ持ませぬが、夫が何とぞ、ザアまだあらば持しやん
したらよからかといふ事でござんする、さればく、今やあと持まして
いたつた一人の母人へおのづと鹿末^{さきつ}に成道理不孝^{かう}にあれバ、イエ、夫へ
悪い御合点^{ごあてん}さつきお前がおつしやるにハ、若^わ返り討にあふたらば、お盛
様を育^{はぐくみ}ヤ者があいとおこしやつたでハ、あいかいあ、ア、いか様左様^{サムライ}夫
じやによつて女房を持^{もつ}や、でも一人設^{おき}たら其や、とお前様や、アノナ私

が女房又成たらば夫こそほんにほんぐの母様と俱よ孝行盡そふ物
まんきあ事やと寄そへばイヤもふ先程のゆき深切見ずしらすの我よむ
禮のや様もござりませぬアまだいあ何とお聞あされます、お前さへ傍
合点あらああたハ私が母様も同じ事孝行がゆたいサア夫ハ近頃忝い嬉
しいハ嬉しけれどよもや今迄エヨそこぞに可愛男があろチ、わつけをあ
い男もあけりや親もあし、兄弟ツラをあし、何にもあし一本立テモ喧斗カタマリ見れば
見る程爪はづれの美くしさツラ、じんじやうあ事ハシいの、よう人が只おこぞ
ま、恥かしい事斗山家生スカニれのぶ骨ヒトコト、私、お前の様あよい殿にそふて
見たいと思ふから花の盛スカニも、目につかず、夜をかぞへ日ヒをかぞへサア夫で
もつんとどぶやら誠と思ひれぬアまだ深いお疑眞實誓文スカニでほんに誠
でござんする、そんあらあふたり叶ふたり、談合せふかと手を取りべテ、嬉
しやと抱ダセしめてわりあき中の妻結び深きゑにしの始ある、あいに相生アヒヤウ

の松こそめでたかりける壽祝ふ母の聲、銚子盃携て、二人が中に押直り
ヤシく嬉しや願ふ所の幸、取あへず祝義の盃嫁湯さいて下されど、母が
手づから酌取てめでたふござるといふより外、三うくぞき詞もあり、麿
あ老女の取結び世界の母の手本ぐ、ふ柳ハ盃取納め、此上あがらいつ迄
も母様と存ます、是ハしおり年寄たわらいが身の上面倒を頼ます、イエく
わたしがヤわしがと、中よき中の挨拶みふ柳も嬉しく、ナアおふたり共
そふぞいつ迄も此所に、成程く、母人の生國故是迄常陸に住けるが
様子有て權現へ年月歩を運ぶ我々、住所みとゝまる間もあし、サツ夫あれ
ハ猶幸、三ッのお山へ程近き邊を住家と遊ばせ、マク旅路のほ勞、何かの
事の寝あがらも、庵の内でお咄しと打連てこそ入にけれ、有漏よりも、無
漏に入ぬる道あれバ、是ぞ佛の渉本成らん、此渉哥の告により、白川の法
皇ハ病惱のいたなり迎、本宮の渉社湯本にとゝまりおへせしが、賽の

法施を捧、祇園女御諸共に還^はへ車の本迄と、山路の供奉の備前守平の忠盛賤が床几を幸と涉腰を暫しけまくも敬ひ傳き奉らる、法皇龍顔うるへしく忠盛朕が重病悉除の爲此三度の祈願を籠歩を運ぶ驗記や惱^なを輕く覺ゆる、偏に神の勝利益^ゆ悦^ゆばしやと勅り女湯を笑を含せ給ひ誠^{のう}や妙ある三ツの山始て御供^ゆせしが聞しに増る靈地といひ、君の惱もいつくより渉怠らせ給ふとい、殊更神の守有がたさよとの給へば、忠盛はつと領掌し往昔平城天皇を當山御幸の始とし、卅三所順禮の始とやれ花山院、瀧の流の元にして三ヶ年の其間、一千日の行より修験道の始とす、其後九穴の鮑^{あわび}の貝瀧の本へ納めさせ、此度勅に隨ひて忠盛海士に下付、瀧壺^{つぼ}へ入しかば何様傘^{かさ}をひろげしとく、れいゝとしへば疑ふ所^いはず、日本第一の名水、手の内^おと掬^くすれば長生を得るとかや、御惱^なも全快^{せんくわい}たるべしと奏し申せば法皇を歎感限りあき折から

吹くる風の弱につれ、ゑい／＼聲鯨波山谷樹木動搖せり。何事ぞと二
方も驚給ふ。渙氣色忠盛騒がすつゝ立上り心を配る其所へ謀叛一味の
和田四郎はくそ頭巾に頬押包、手の者引連追取卷我々ハ深山に住順禮
道者に合力更世を渡る山賊へ路銀衣類を渡されよ異義に及ばず此祖
道跡へも先へも通すまじ何とくと呼へつたり、忠盛ふつと吹出し、事
る愚や白川の法皇還御の道備前守忠盛が御供あるぞ、普天の下に住む
がら御恩をしらぬ蠅虫めら三拜九拜かつつくべひ道を開けと大音聲
イ法皇でも鳥で毛翅をもいで追拂ひ女御斗を奪ひ捕と下知みむらが
ら溢者一度に寄を寄付す蹴倒しはり退嘲笑ひ祇園女御を奪へといよ
つ程實の有山賊めら忠盛が供奉の帶劍切味見せんと抜かざり一ふり
振バ三人五人、岩淵始逸足出し逃るをやらじと追て行跡にハ二方いか
がぞと歎慮を苦しめ給ふ所へ取て返す悪黨原ソレく女御を奪取と既み

危き後の庵、一腰ぼつ込平太郎飛で出さまよつかせと弓手めてへ投退のば。授退のば。母人女房共御二方の介抱かいほうをと詞の内ないいざくと母とお柳が御供し忍ゆるさせやせば平太郎心安しと抜持て支さる族やからを大げさ小げさ真向堅割車切残る奴原余さじと追かけ行ゆこれく待てくと聲かけて、お柳ハ母を伴ひ出ゆ上う様を預る上、お年寄れた母様あぶなに過有てハ不孝ふこう、跡あとハ私が受取た、内でやた所迄早はやくと氣きをせけば、實じもく母おや大事の其上う、アヤおニ方がたにも氣きづかひ有あ、かふいふ中うちもあぶあいく、然らばそこ迄立退のけんと背指向せむかむて老の身に孝行道こうぎょうどうハまつかふく跡から早はやくと云捨て谷道傳わたりひ急行、韋駄天走えだてんよ平忠盛、君きみへいかにといぶかる内うち、お柳がいざあふ法皇女御ご忠盛、是成者せいせいしゃが介抱故かいほうごと仰あおもあへぬにすく、土つちも草木くさきも君きみが代しろに住すこそ深ふかき御恩ごおんあれ、何なんのお禮れいをもしやる間に、新宮の濱手はまてに舟ふねの渡わた海うみも自由じゆゆ、一先かしこへ御ごひらき。

實尤ど悦ぶ忠盛情の禮へ退ての事恐あがらと負奉り、女御の御手を取
ふ濱邊の方へと出給ふ、又もや人音聞ゆれば、心に黙き呑込で見やる
柳に手をかけて引ペしいわりじだれる枝、女力に押撓め腰打かけてた
べこ盈はんせるにうさをはらしゆる、うろく眼の手下共コヨヤク、女、法皇女
御メイテへどつちへいた早くぬかせ、サ其お方ミタチへいつの昔あの坂口をまつ下
り、二里も三里もさつきの事ハヤヒ、ちつと休キナマサんせ、茶をわいて有たべこも爰
に、いか様夫程に違ふて、天狗アマツクニでもとゞくまい、一ふくと腰打かけ
てんでにたべこすつばく、時分をよしこあたへ、氣轉カシタマシ、茶を汲ハラフんで
立拍子、ほんと刎ハスルたる柳の鞠、岩にびつしやり打碎ハダルかれ微塵ハシムニ成て死て
げり抜ハスルも氣味よし心地よし、よしく、爰を立退ハセバシて、楊枝村のよしみを便
り、思ふ殿御といつ迄も、母御に孝行盡すをよし、折もよし有夫婦が中、ふ
しきに寄を三熊野の、神の惠めぐみのゑにしどと悦びいさみて、「走行爰も岸打

浪の音、新宮の濱先につあき捨たる渡海づくり、季仲が殘じたる術と急
ぐ武者所轄六猿平引連て岩淵諸共かけ來り、忠盛めが勇力に此時澄が
家來迄、案に相違あぶ首尾、何分我へこらぬ分、味方顔して裏切せん
岩淵へいかよ／＼某へあの森かげに身を隠し、法皇女御へ足弱共此
舟見付て乗へ治定、忠盛さへ討取バ法皇へ籠中の鳥、女郎へ安々都へ送
り黒帥殿の御簾中、よ／＼此時澄へお公家様、汝も大名合点か、合占
合點としめし合身を潛てぞ待めたる斯と／＼ざや、白波の砂を踏立平
思盛見やる汀の大船に人音あければ幸ひと、君二方の御手を取とく／＼
めさせ奉り纜とかんとする所へ、待もふけたる悪黨原夫と聲かけ切付
るを、ひらりとかれしかい追取はつし／＼とあき立れば、爰の岩かげ森
のかげ我も／＼と顯れ出茅の穂先白浪の、切先立浪をう／＼途を
失ふて逆行を余さじやらじと追て行、じすましたりと和田四郎サ／＼此

間がよい首尾ぞとひらりと飛で乗移れば、何者ぞと驚く玉駄手ごめ
よし、驚六猿平合点か心得たりと帆を引上、船櫂取のべさつさ聲半段斗
押出す時しも、宙をかけつて平忠盛同もむ三寶遲かりしゃく天子に敵た
ふ人非人同其船戻せと呼へつたと、岩淵同をつと打笑ひ、陸同でこそ負ミサてぬ
たかふしたかられこちの物ノハ馬鹿カつらを見よく、といふに忠盛身を
あせり行つ戻りつ見付るもやい、纜ミコトナしつかと手にから巻、天のあたへの
もやい、纜戻ミコトナしてくれんとゑい、聲岩淵ミコトナあせつてレ、纜ミコトナを切よと下
知すれ共、刀ハサウエの残らず打落され、さすが一本あら繩をほきかん様も鼠の
潮磯シマツシにへゑい、引力戻すあやれよと夕浪ハシタマの、とちめん帆ハタケを巻、船ボウを押
立ゑいやんさ、火水ヒスイに成て押力、引戻さんず金剛キンゴウ力ゆらり、ゆらり、そみ
合しれ、小島のうごくにとあらず、され共忠義の忠盛ミツマサ、龍神部類リョウジンブリュウの擁護
にやあんあく千瀬チセに引付く、ひらりと飛乗勢ハシヨウセイひに、恐アラシをあして和田四

郎さんぶと飛込水底くやり、行方しらぞ逃失たり、這かゝんだる二人の
殘黨手玉に掴んで投込所へ、おくればせある武者所拾ひ首の血刀さげ
ていかめしく山賊山賊、出合切ちらし漸只今參上はな、鼻も動かぬ廣言たら
だらヲ、よい所へ武者所君が涉船の楫取して長島迄守護せられよ、我の
陸路に殘黨原取て返さば防ぐ爲濱邊傳ひ供せんと、指圖に是非も時
澄が、時の用にいかん取役、君も女御も安堵の思ひ、忠盛いさんで下知を
あし、時刻移るといふ浪にヲサ合點エイサンセイ、工面が違ふアガ、
に押や此艦づかを取て時の間に早舟手舟に乗廻し、數千艘にて寄る共
思盛かくて有からひ、腕も筐舟あま茶舟、軍船漁船押切て破軍の効先鋒
先に片端舟かたはし一擗ぱつころりくろりの丸太舟、てんとう天魔の障碍もあく、公
にす、むる漁敵ふぢき、浪間にうつる舟守護する君が寶舟千里一はね、走舟
都の空へと還くわんぎよある

第二

時を得て威勢日に増、平家の館備前守平忠盛、數度の武功の恩賞に下し給ひる閨の花、祇園女御と聞へしハ柳が枝、又初櫻梅の匂ひを含せし、色香沈勝りおどりあき、池殿御前と指向ひ乞目争ふ双六の左右に別れてお伽役、池殿方にハ進將監國貞女御方よりお出入の輕薄醫者の多熊法眼、勝負を二人が酒賭に負方、が、春云合せ、おもひくの片最負いと媚けたる遊びニ、やく、池殿様ぞお勝遊ばせ、三度のお負で此將監續さまに三盃、やもうそふもたまりませぬ、今度ハ極てお前の勝法眼、春すぞ覺悟召れ、そふじやく、其石切てマテ六地をおふさぎあされ、これ將監助言ハあらぬしたが助言ぐらぬで女御様にハかてぬく、じたい忠盛様鑑の目より人目を忍び、年月戀に乞目、の君鑑、レク、今度ハ朱三が出ると、池殿様ハ又むしじや、亥ゆ三くと呼立れば、女御ハ却て池殿の

勝にあれかし我乞目打じくと直成心に連て鑑の目の、じゆ三とすれ
バ女御方、法眼始いさみ立サア又勝じや將監殿、呑だくと盃を突付られ
て池殿様コリヤまあどふでござります、女御様ヒツキヤ畢竟が勅錠チヨクヂンのテカケ妾故、御客
様同然、いかに亭主テイジウぶりじや迎そふか負あされてい此將監イキツキモ
すと底意に針持ひいき口イキロ將監、其様に負腹たちやるあ、亭主ぶりで毛
客ぶりで毛負るが下手ハタハタじや併女御様の勝續ハシマツで此法眼酒がたらぬ、貴公
ハ下手ハタハタあ池殿方で酒が過て面白おもしろからあやかり者めと嘲アガメば、女御ヒツキの氣
の毒池殿ハシマツの女心の一筋に側の手前も恥紅葉思モカツず顔の色目立ハタハタ
ほんにほいあい負様ハシマツしたが忠盛様の済秘藏ハシマツの女済様ハシマツひよつと自ミヅカラが勝た
あら忠盛様が腹立て、双六斗か大事のく、人の花迄ハシマツ乞目のお上手、今か
らああたの弟子に成、此筒ハシマツの忠盛様ハシマツよ、ふられぬ様にせふひいあふ、將
監ハシマツそふじやあいかいの左様共く、じたい此双六の鑑ハシマツの恐ろしい性根シヤウガ

あ物もの唐士とうじの玄宗げんそうの官女くわんじょ、虞子君楊貴妃うしんやうきひと乞目爭あらそひ、重三重四じゅうさんじゅうよに朱しゆをさいて官職かんしょくを給たまへる故ゆゑ、今いまの世迄よのせも重三重四じゅうさんじゅうよといふ事を、朱三朱四しゆさんしゆよと呼よあらへず、塞ふさの二にッハ月日げつじつを表あらわし、人ひとでナシバ、本妻ほんさいお妾お妾ナシヤ、お前様おまえさまハニ本妻ほんさい其本妻ほんさいでも乞目ふりがき此白黒しゆくろの石いしの數すう、夜よも晝ひるも筒つばを握いざなり五二五三ごにごさんに放はなさず、本妻様ほんさいさまハむしくむしくで、明目斗めいもとふつてか、必油斷ひゆだんあされあと、お爲ためごかし、云廻うまわせば、法眼引取ゴレサ國貞こくぜい法界ぼうかい悟氣ごくいおかれいく、戀こいに前後ぜんごのわかちわかちりあい、殊ことに女傍めいわハ法皇ぼうりょう様さまから勅諭ちょくゆうのお妾お妾叶うづくぬく、と聞きより池殿いけどのせき立給たまひ、回法眼みづか、自じか女傍めいわ様さまに叶うづくぬといふのかや、媚容みめいかたちハおどる共、夫め大事太切だいじたつけに思おもふ心こころハ負うけせぬ、勅諭ちょくゆうざたないやく、と怒いかりの詞ことに付込將監ふりこむじょうげん、いか様法眼みづかが勅諭呼めいゆうへり、又またしても氣きにくひぬと、眞顏まひんの論ろんを聞き女めは、是これマテ、將監じょうげんの詞こと共覺くわくぬ、何なんしよ自じ其様そのようあさもしあさもしい心こころを持も物ものぞ、いつ迄よのせも池殿いけどのを頼たのまねばあらぬ此身このみの上うへ心こころにかけて給たまへるあ

と氣の毒顏の渋氣色^{イイ}、いつ迄も末長ふとおつしやるが、池殿様の聞所此將監^ハ呑込ぬ^{ハテ}何ぼ貴殿^ガが呑込いでも、忠盛様^がお呑込^{ナシ}テ^ク、^テ女御様^と、多熊^と將監相撓^{づち}の拍子^{ひあし}揃^{そろ}へて焚付れ^{ハタキ}、^{ハタキ}懊氣^{ハルカニ}に遁^ス、女氣^ハの穗^ヒに顯^{ハシメ}る^シ盤^{ハシマ}の面石^モ亂^{ハシマ}る、斗^{ハシマ}ニ間^{ハシマ}の漢^モ引明^{ハシマ}て、將監^ガ嫁^{ハシマ}の若倉^{ハシマ}しづく立出^シしとやか^ミ、是^{ハシマ}ハく、お二人様^はしたあいお顔持^{ハシマ}、法眼殿^も舅君^にもあられもあい、鴨川^の水^と鑿^{ハシマ}の目^ハ帝様^{さへ}お心^に任^{せぬ}とやら、勝負^の知ぬか時^の興^{ハシマ}お慰^{ハシマ}夫^を傍^{ハシマ}から何^のかの唐^{から}の倭^{ハシマ}の諺^{ハシマ}で互^{ハシマ}よ氣^の立様^に、お伽^でハあふて喧嘩^{ハシマ}の行司^少お嗜遊^{ハシマ}ばしませと、やり込まれて顏^と顔^{まじめ}に成^ゼ心地^{よき}、^{サシム}テ^クア女御様^奥の間^へお越遊^{ハセ}、お二人置^たたら又何か池殿様^{にも}俱^もに仕返^しの勝負^の況^{ハシマ}六所^をかへて遊^ハしませ、女御様^{から}アお出^すと進^{ハシマ}テ^バ立給^{ハシマ}ひ池殿様^お先^へと委縉^{ハシマ}ふ海^{ながめ}棠^{ハシマ}の花^の袂^{ハシマ}を打覆^{ハシマ}ひ妙^{ハシマ}引連^{ハシマ}若倉^が案内^に付^テ入給^{ハシマ}ふ跡^を詠^{ハシマ}て將監^が

池殿の傍に寄忠盛公とあの女御、浮名の立た深い中、法皇が呑込で勅錠のお妾てかけお前様まへさまの俗ぞくいふ奥様の餅の形、日かげ者と同し事、そこへ心の付ぬとい身をしらぬとや物、かうやもお馴染だけ末の事迄思ひれて此將監まへんさへくゆく思ふておりますと、實に見せたる空涙、聞にましくる池殿の胸のはむらみそゝぐ水、憤氣憤りがましい事いへば、あいそのつきる事もやと包くわに餘る物思ひ、若も女御みづからが見かへられたらどふせうぞ、恨めしや悲しやと身を震ふるひして、かこち泣、二人ふたりへ黙きしすまし顔おほ膝ひざと膝ひざとをよじり寄よせ、お道理ごと、らみ臺だい様さま、法眼ぼうげんが醫術いじゅつである女侍めいしを、忠盛様に飽あひする仕様しじやうとつくりとお頬有ありと吹込ふきこ毒氣どくきをみだいへ黙きうつづ、そんあらあらふぞ能様のうじやうと法眼殿頬ぼうげんどのほぞや、成程なるほど、呑込のぶこだ仕様しじやういかふと傍そばに有合料紙りょうしへと硯すゑ、筆退取ひしりどてさらさらくと書か認めたまて差出さしゆだすを池殿いけどのに前手まへてよ取とて、キアは、そふ恂ひづりあさる、いは得心とくじんであるいそふあ忠盛様ちゆうせいさまから大切たいせつにお前まへある

でと思召行末長ふ添るゝ様かふするもお前のお爲サ得心でござる
かと二人が工に言廻されハ添たいが高じや物女傍にあいそのつきる
様必と頼ぞと仰をハット呑込法眼ちつ共氣づかひ召るゝあ首尾した上で
ハ一廉の傍ほうびじやが合點かと首尾さへあれば望に任すイヤ夫さへ
聞たら實を入れてお受合ナます必穩密くと黙き叫く折も折勅使のお
入と呼いるよど二人ハ表へ池殿ハ奥へおしらせヤさんと立別れてぞ
入給ふ程あく音けたかくも右大臣師實公北面の武者所時澄を相
へ儲の禱につき給へば館の主忠盛卿進藏人諸共に禮義正しく平伏有
右大臣殿正笏しいかに忠盛貢邊の勳功勸掌にハ内の昇殿を歎され其
上女を給へる事家の繁昌身の譽有がたくも思はれよ今日の院宣余
の義にあらず法皇頭痛傍脳頻よよつて熊野權現へ立願有し所に三
夜よつゝくふしきの靈夢法皇の前生ハ蓮花王坊といふ修驗者三山百

度の歩の内九十九度にて慢心發り忽破旬の怒を受谷底へ投付られ、支
駄の微塵亂碎といへ共頭の柳の梢に止る夫星霜遙に移り、谷の柳へ
六十丈より茂り梢又殘る前生の觸鬚、風の吹度より動くに連て頭痛
の惱是を平癒あらんより彼柳を切取、王城において卅三間の御堂建立
あらんとの結構則忠盛へ任すへしとの院宣へと述給ふ、忠盛すさつて
頭をさげ、物數あらぬ某かゝる宣旨を蒙る事、武士の大慶是より過ず畏り
奉る。藏人太切成君命熊野山へ立越、柳の有所を尋求する其使汝其旨
心得たるかはつと斗ふ藏人が、お受申せば、其役目は此時澄、仮初あ
がら天子の御用倍臣づれいやられぬと、支れば師實公鹿忽へ時澄。此度
の造營の忠盛万事承へれば、私にハ斗ひがたし、武者所の役がらハ大内
の非常を正し、警固の外へとして諸用に構へれど、仰々時澄、サア夫ハ夫
で濟やが濟ぬ謀反に合駄玄た源義親、太宰帥が有家の詮義爲義が預

つてもまだ有無のさたもあし、藏人源氏の勇氣に氣を呑れ、憶痴風での延引かと、擠が一味の空とばけ、言ほぐすれば、師實公初よりらざる作配立、平家の事へ源氏が正し、源氏の悪事へ平家より源平兩家相互、君を補佐する武將の役去るがら、義親が問狀今日中、忠盛きつと沙汰せられよ、先法皇へ領掌の旨奏問せん、早退出と立給へべ、忠盛主從式禮に見送る先へ武者所肩肱はつて立歸る引違て出る奏者、陸の冠者爲義大宅四郎惟弘召によつて參上と披露よ、つれて入来る智仁勇を備たる其源の爲義逆、十八歳の角額、長上下を爽に、遠武將の其骨柄付添武士の大宅四郎大夫惟弘六十に餘る腰刀、進藏人家貞が舅の禮義内證に威義を正して座よ直る、爲義忠盛に打向ひ、今日の召用いかいと有ければ、ま速の涉來賀祝着く、先達て館へ預し、義親の義改ゆに及ばぬ共五年以前法皇熊野へは幸の折から、岩淵和田四郎といふ者鳳輦に向ひ、狼藉

せしハ季仲が所爲成由、彼和田四郎ハ、義親の良等鹿島三郎と聞及ぶ、此程都に徘徊し、民間又乱入事日夜の注進、是によつて黨類を擄捕拷問にかけし所、太宰黒帥又源義親叛逆に紛れあき條再三の白狀去によつて義親を召捕貴殿に預、逐電せし季仲が有家白狀させられよと申渡し置たるハ、親子一所でいいといふ爲義の面晴先刻禁庭より師實公別勅の趣、今日中沙汰致すべき勅諫之と有ければ、爲義謹で畏り、大切成詮義の役殊更父子の間とや、旁以てゆるかせあらず、百度千度責具を以て拷問に及びしヘ共、いまだ白狀仕らず、是ある惟弘が斗ひにて、晝夜寝さゝぬ現貴、十日餘り又及ぶ所、更に色目も見へざれば、此上ハ勅諫に任すべキ外いはずと、言上有バ惟弘も手をつかへ爲義の詞のごとく様々におぞしつすかし責とへ共、白狀致さぬしぶとい魂某辻も右の通義親を守育たる因縁によつて何ぞ善心又翻させ源家の汚名をすゝがんと心を盡

すかいもあく愚老を始め爲義が胸中御覧察下さるべしと詞も半涙ぐ
心を察する忠盛主従俱よ心をいためしがノウ爲義今日改て勅銳有季
仲が城郭明白に相知あべ討手にハ爲義たるべし又義親白狀あきよむ
いてハ爲義が手に斷罪せしむる條院の勅命急歸つて今一應問狀にか
げられよ折々旁の胸中察し入幸薄酒到來せり酒ハ愁を拂ふといへば
心斗の我饗應藏人早くと仰の内兼て用意や有つらん長柄盃臺肴お傍
小姓が汲酌又忠盛受てすつとほし爲義一つとさし給へば御懇志の
御盃頂戴ナヒ取上ててうと受たる盃に肴を勧んそれくと詞の下彌
人立て一間を袋に入たる太刀一振忠盛に傳ふれハ取直し押戴抑此太
刀ハ上平太貞盛將門を退治の時朱雀帝を給ハリし小鳥丸の名劍家み
傳れる重寶あれ共義親白狀あきよおいてハ是を以て刑罪せられよ爲
義と効を結んで秘封を付膝元に直さるれべ爲義心にせいたる面色ハ

義親が刑罪志の賜祝着より存れ共平家の家に小鳥有バ某が家にも鬼切と名劍、前九年後三年數度の軍と勝利を得し源氏の重寶、何ぞや平氏の劍源家と用る謂ありし、若輩者と思召ての御賜、す受たる同前と押戻したる爲義の心をばかつて惟弘、只默然と詞ありし忠盛大に打笑ひ、爲義にハ若輩故鹿忽とバし思へれん、叛逆一味の義親ハ、爲義貴殿の父あらずや、源家の重寶鬼切丸の劍を以て、現在父を斷罪せられバ、傍身ハ忽不孝の名を世上にふれ、鬼切の名劍にて同し源氏を切たりと、劍も法を失ふ道理、そこを察して此小鳥爲義の手をかつて忠盛が討も同然、されば不孝の科もあく、勅諫も立所と抜群の忠節、惟弘いかに忠盛の仁義を兼たる引出物感する斗人、適名將聰明獻智源平兩家と別れ共直成淀の忠盛公志のに賜頂戴有と惟弘が取て渡せば爲義も、すさつて三拜押戴、忠義の道にハ父子兄弟戰ひいどむも武士のあらひ彌白狀

あき時ハ只一討と跡言さし、恩愛親子のうき思ひさし、俯ハておへします、胸の思ひを汲ハ取惟弘アキラム、若ハもや白狀召れあバ其時ハ忠盛が身にかへて義親の命乞ハシメテ、禁庭宜シテ、奏問せんシテ、有がたしと悦ぶにぞ、爲義ヒ封印の袋をつくシく見シるからに、此小鳥も音を出さば、父かれいとや叫ハスらん、思へば武士の身の上程忠盛公おさらばと、涙隠して立上る、陸冠者リュクガシヤが元服して、六條判官爲義迎保元以後の戰ハサカに子の義朝にあへあるも討る、謂ハセを今爰に思ひやられて哀ハシナへ、惟弘も打しほれ、お暇ハシマと立上るを、忠盛曾しと留給ひ、酒はづれハシマ何とやら藏人一獻すシタマツめよど、仰ハシマニハシマト惟弘が、戴ハシマ盆つぐへ聾肴ハシマ忠盛臺引寄、手づから給ハシマる有りがたさ、兩人さらばと忠盛公、藏人來れと打連ハシマ帳臺ハシマタウ深く入給ハシマ、跡に惟弘手に受し、肴ハシマを詠ハシマてうはつと心に黙ハシマき立上り、若殿ハシマござれ、供せいと持て立たる太刀袋、情ハシマもともる、口ハシマもる肴ハシマを包ハシマ神あらで、心の底を堀川の館ハシマをさして「ハシマイア義

此様白狀をあされませ、敵の有家さへおつ志やれば存分に寢させます、
アまだいの、此様あ鳥の羽でこそぐつてハお目か覺ぬ責道具のそら太鼓
耳のはなて打ふじやあいかまきの殿チ、夫がよからと立驕晝夜ほぞうやをわか
たぬ現貴詮義の底そこを堀川の六條通に一構陸冠者爲義の館にハ内匠頭
義親を預りて、太宰帥季仲がたて籠る有所を尋る問狀の役目もつらき
始共時かはりといしられたり、おめろさい共、是程目を明てゐるに、又し
て、毛耳の端はたでやかましい置あがれと、睨目玉のぞめだまもどろく目元ツノお目明
てござるあら所を早ふ傍意そばよるなされ、しらぬはい、同じ事を毎日くく、その様
え責せめた迎しらぬ事ハいつ迄までもしらぬぞく、サアしらぬくとおつしや
つても、お前より外知た者があい故に、ヨシナ、く、サア聞てゐるへいやい、サア
聞いてござるあら早ふおつしやれ、ソリヤ何を何であらふと敵の有家を、おり
やしらぬ、何にもしらぬ、しらぬくも白川夜舟かわ楫取兼るふぜいこ源家

の大老 大宅四郎太夫惟弘が女房夫の留主と氣を付て奥の襖を曙か、腰
よ梓の弓取の行義は常の座敷ゆふ立出是は叔養君やしなりまだ白状しらじょうへ召れぬの、
其様にうつらくいつ事干ほするするぞ、お前の心が心あら八幡太郎義家公
の御惣領家督おうそうりょうをも繼つがしやる等、爲義様めぎようへこあたのわ子まだ年ねいいかね
共、武勇ぶゆうといひ忠孝の道を守り、八幡殿やはたでんよふにた大將だいしよ、お前まア誰に
て其様そのよあ惡者あくしゃにあらしやつた、季仲きなかが謀叛ぼはん一味して天下を騒さわがす無む
道人やしなりそと、養育やういくた我わ御先祖ごせんそへ恥はずしいしづ人に斗物とうものいはせうつらくと夢
現ゆめ、女共起おひきせやいい、いやもうその様よう致いたしても、お目の覺さめる事ことじや
ござりませぬま、夫おでもいへせねば埒らが明あぬどく、ちつと手てがたりして、
白狀しらじょうさそふと立かたる折おりも折進藏人せきしんざう様御出ごしゆつへと、書院に小性こじょうが取次聲とりつせう
ア、聟藏人きのこざうが見みへたどりどり心得こころぬ、夫惟弘殿めいこうでん、爲義様めぎようのお供ともして、聟的主
人忠盛ただよし様へいかしやつた又歸りの遅おそいを秦いんじる中聟なかきのこが見みへるも訝いぶか

しと、出向ふ一間へ入来るゝ藏人あらで若倉が福委のしとやかさ、是れ
是れ聾殿かと思ひの外娘の若倉シテ藏人の見へあんだか、夫藏人の御
用しげく名代^{めだい}又參る様にとすされました、夫の太義やよふこそと親子
の膝^{ひざ}を押あらべ、今日の爲義様と、様諸共、まだ忠盛様と御内談^{うちだん}の其
間藏人が手付内意^{うちじ}又參りし其譯^{わけ}の舅^{おじ}惟弘殿^{これひろ}又養君^{やむこ}義親様を預り、歎
の有家を御詮義有共今に白狀^{しらじょう}あいとの事、そちも義親殿とハ乳兄弟の
事あれば、俱^{とも}に詮義して、お年寄の親^{おやぢ}へ心づかひを休る様にと夫の
内證^{うちしおり}夫故に参りましてござんすと、聞て黙^{まつ}きサレバ^イ、丁^とせけふで十日余り
の現責^{うつとせめ}、今も今傍^{そば}へいて異見^{あいみ}をしても夢中^{むちゆう}又成ていやつしやるシレ又俯^{うつぶ}
てじや起^{おこ}せく、させつかれて、又打立^{たてたつ}る太鼓^{だいこ}の音^{おと}、せんあめつさい共
目を明てぬる物眼玉^{まなこ}にいからぬかと、呵^ハる詞^{こと}も現^{あらわ}やたひぬ、^アく早ふ
白狀^{しらじょう}と口々傍^{そば}からせがめ共ふらりく、^ハ糠^{ぬか}に釘^{くぎ}てたへん廟斗^{いぶ}、あれ

を見や若倉毎日毎夜あの通幸おじやつたそあたと二人責て見よふと立寄て、爲義様や夫の歸りも追付でござろぞや、今の内云申せられど、脅中を突バ目をほつちり、若倉もみじり寄申母様もふ御詮義にい及びませぬ何ばお隠しあされても天命といふ物で、連判狀の有所が季仲が隠家を知ましたと、聞より、義親立上り、季仲が有家近江に居事知たるあ、ア其通ります、其近江路を聞く斗、夫程知てござる物あぜにとふからかうしやらぬ、廻もの事、方角も所の名も有やうにいへしやんせ彌か隠し召るれば今日中みお命があいとの事、夫をしらせにきた私根が乳兄弟の好だけ、次手に白狀と、詰かけられて空とぼけ、寝ぶたいく、近江燕のふろ吹きをふじややい、近江の燕の名物、あんあ燕を矢に矧で神通の燕矢を射たらよかろといふ、事じや、ねふたやと伸欠、是から奥でぐつたりとねさしてくれとふり切て、はがいしめある繩取

取姫共があらぬく、ねさしへせぬとどら太鼓打立く追て行跡を詠
て母娘鞠る中に曙が若倉誠に有家が知たかや、母様の何のいあ、今
の様にやたれ夫が智略、どうして成とか、様やとも様のお心を休る様、
義親様みへ取分て白狀あいに極れば彌歎へ一味の印、首討て出せと有
大内の御評定、藏人殿も笑止がり、眞殿の養君けふの日中か生死のさか
いざつぱりと白狀させ命助る斗略みへ所も近江と聞たればかふく
せいと夫の差圖、今の如にやても中も氣強い義親様、母様仕様りあい事
かといへば黙く涙聲、そんあら白狀あい時へけふ切に首討とや、夫へ
ひよんあ御評定、去あがらどふぞ助る仕様にり、隨分いへせて見る思案
そあたも奥へと勧る所へ、兩人暫く待と聲をかけ、西八條立歸る陸
冠者爲義ハ手に持太刀の袋さへしんくの紐のとけやらぬ、胸の思ひを
押包しづくと座に直り、曙同道せし惟弘宿願の旨有とて六角堂

へ參詣し跡も歸るべし。今日忠盛招れたる仔細外でもあし、義親彌白
状せずんべコレ此太刀を以て首討て見せよと有て平家の重寶、小鳥とい
ふ名劍コレ此ごとく封を付、忠盛手づから下されたり、つくべく心を察す
るに義親ハ現在の父、我ハ又子の身として親を討バ不義不孝討ねバ違
刺の科遣れず、忠盛もそこを察しいれぬ心ハ此袋口を緘たる封印抜さ
しあらぬハ院の勅命、ナア曙若倉われ達もつあがる縁はぞけ兼たる爲義
が胸中、親を討て忠義に成か、不孝又成や、是を以て思案をせよと刀かけ
に直し置亥はくとして爲義ハ帳臺深く入玉ふ跡にハ親子顔見合ハテ
どうがあととつ置つ、詠る刀詮方も女の智惠に是がマア母様そふでござ
んする、何分にと、様がお歸りあらば俱とにミ、夫もそふあれど思案を
せいといへ亥やつたが、そふがよからうと手を組で額によせる皺の上、又
もや皺を寄にける、若倉も諸共又打傾て居たりしが、ナ母様とかくハあ

い奥へいて義親様を責めまして白狀さへあざるれば、一味であります。譯立
そふに存ます。それく夫がよかる其通りを爲義様へうが則思案の
返事、かじやと打連て、帳臺として行跡へ人のとだへを真黒出立、かた
への井戸から忍びの頭巾邊を見廻し相圖の笛呼子の志らせも折義親
差足拔足竊が耳に叫合、一卷取出し手に渡し、夫こそ鹿島三郎を受取た。
諸國の廻文連判状、甲賀山の陣所の案内も内に有季仲へ届てくれ。將
監汝が管藏人を味方に付る手筈へ退て、萬事首尾よう仕課あべ國大名
に取立るぞ悦べく、有がたい傍仰、甲賀山へ出達も今宵が内萬事し
めし合さん爲、とくち忍んで最前から様子へ委しく、あの太刀かけにか
けたる太刀忠盛から爲義へ、お前を殺せといふ事迄がうくと叫け
ば拘りしあがら立寄て、袋を取上打黙き、中の彌小鳥丸勅諭と有から
れ何でも大事の預り物、是も次手に持ていけ紛失の咎にして爲義めに

詰腹切すへよい氣味く、我も後々忍び出何事も重てし、げに尤も太刀受取、然らば隨分首尾よふとしめし合する非道の庭、心奥にへ聲々に義親様へいづくにぞと尋る聲に驚く二人、太刀を大事と様の下、忍ぶ將監義親へ狸寝入の空駄からいびき、爰にと燃共追よ走出、ハタ藤枝殿人をねさせぬ報ひやらこちらもめつたよ眠たふて居眠てゐた内に、よふ抜てお出たあふマダふ目をふ覺さうしとやらも太鼓も打交まわせに鳴せば耳に兩手を當あさかしましやく、こりやく、赦せと逃出せば、又もや奥でねよふであ、何國迄もとそらたいこはやせくと畫狐がくこだまされさんすあ楓野殿化されたと白書院襖の内へと遁て行、庭にへ將監玄すまし顔、太刀を提ひ一卷を大事と見やる石垣の、水ぬき門の穴かしこ人ハ白洲に身辯夫じんべんと見付る若倉がひらりと飛おり聲をかけ、太刀を奪うふ何著ぞ、やらぬくとも玄やぶり付、物をもいひずふりほせき、行んとするを待まと留るを

がへし當身を入れつたりころぶを見向もせず、うましくと四つ這ひ
はうくくぐる土龍體どりゆうたいのふとく出兼る間に、むつくと起立若倉が長押
の手鎧追取のべ曲者待と突留たり、シテと叫へ塙の外戻りかゝつて大宅。
惟弘、目覺つよき太刀袋、一卷口にうごつく竊内しきうちに仕留る聲高く、小鳥
の御太刀を奪取たる盜賊を、若倉が突留たり出合給へと呼へる隙、外に
の首をかき落し、袋も一つに引かゞへ、裏門口へと走行、何事かへと冠者
爲義曙諸共義親も様先に踊出、盜賊といづくにある、太刀を奪たへ何者
ぞと仰天顔あやまてん驚け、則爰にと引入る、竊が死骸しめいへさげさげふして、太刀も首
もと驚若倉爲義諸手を組ぐつ共いれぬ心の工夫、曙親子の顔と顔、鞠果
たる其中に義親一人が打黙うつ黙、盜賊の突留しが奪へれた太刀ととこに
小鳥の忠盛が重寶おもほ其太刀があいからは、預つてきた爲義言譯いぶわげにへ痛い
腹切すべ成まい笑止やと、何があぬする口車横に押とひ見て取老女シシ

義親殿、小鳥もせよ其太刀を爲義様が預つてござつたを、いつとあた
れ見やしやつたぞ、サア何を證據に痛い腹とへよふいりしやつたあふと
あたへく、コレ大悪人のこあたの首討と有勅諫討ねば勅諫に背といひ
討て渡せば不義不孝、親のこあたを討兼て、此ばゝや娘に太刀を預、よい
思案してくれと頼でござつたれいあふ、まだ年がいかぬでも親子の道
を辨へて、切兼てござる爲義様、夫に何じや腹切とへ、胴欲もよふいられ
た事、其五音で盜人ぬすひも、大方よ知て有ハシの、シ盜人が知たとひ、扱ひ若倉
われじやよあ、エ、此若倉が盜だとハスチ盜人たけくし、太刀を奪ひし
盜賊ぬきぞを突留た若倉あせ太刀ハ取返さぬ、其太刀ド見よふ、其死骸がい
わが舅將監國貞嫁のわれと黙き合盜たに極つた、そんあら此死骸ハ
舅ひ将監様でござんすかと、又惄りの若倉が軀からに立寄見廻せ共見知た
お首かあいからひと、騒ぐ娘に驚母、義親が獨笑ひとりわらひそこへとペ志りがむ

からふも知ぬく、若倉何と、言譯有かずア夫ハナ何とすりやをふでも此死骸ハニ、將監に極つた、言譯立ぬと用捨ハアい、われから先へと立上る。
ア義親殿先待れよ、盜賊爰にと一間カ歩出るハ大宅四郎惟弘、小脇に抱
し狭箱、真中にざつかとおろし娘若倉に詮義ハアい、署も扣へて居やれ
と押直リテ、亦ふ爲義公、今日とテ胸中疊と察シテ、追て御安堵させテ
きんと挨拶のべて惟弘ハ義親に打向ヒテ、盜人たけぐしいと出はう
だいに云さがし、身の科を人にぬる盜賊の正脉、お目みかけふとふた押
ひら開き上に並べる太刀袋、一巻を哺たる甲頭市^{かねづ}の首諸共、見るをきつくり
義親が胸に覺へもさあらぬ顔、惟弘騒がず、娘此首の實驗して、盜賊で
あい明りを立よと詞の下、頭巾を取て見る顔ハニ、こりや將監様じやドレ
誠に將監殿、をふしてこあたの手よりしと、鞠る曙若倉が將監様とし
らあんだハ忍び姿の黒裝束、お首ハドモ様お前の手にテ、西八條カ歸

る道爲義公に引別れ、六角堂へ參詣し裏門通りを歸る時、水門を出る其將監、曲者ぞと見る内、見方り有太刀袋、一巻を口に哺送出る時も時、内の騒動、そちが聲、何の苦をあく首かき切、立歸つて能見れバ姪の將監國貞、あむ三寶日比の積惡斯、有んハ合点あがら、若も此太刀余人の手み渡りあべ、ナフ爲義公、げにもく、此爲義が難義の難義重あるべきに、能折え歸り合、再び手に入嬉しさと、父義親を尻目にかけての給へバ、善惡正しき惟弘が、御義親殿、こあたハモツ目が覺ましたか、眠たふりござらぬか、大きあ目玉をきろつかし一はあ立てさしいこさい、盜賊の手引したハ彌、こあたに極つた、何と此義親が手引とは、ヤアらがふまい、證據といふハ其死骸、將監との又何を印よおいやつた、夫ハ夫ハとは、ハハ、あのでとく眞黒出立現存の嫁でさへ見違た將監、首もあく印もあいあの骸、將監じやと見知たあた、手引といふ又相違ハ有まひ、何と、一句の理詰

にさしもの義親ミヤたまらぬと遂行首筋引戻し、老の手先を忠義につよ
き用意の早繩ハリぐう。くと玄め上へそつかと引すへ、人に悪事をぬす
り付、身を遣れんと、比興者ヒケイザ科極ヒカルつた大罪人刑罰ケイボウハ爲義公、もはや猶豫
え及べずと太刀の袋を指出せば、爲義取て封引切、鯉口拔かけとつくと
見ヒテいかに惟弘、季仲が有家の白状、問落せしか何とく、さんひ斯迄仕込
だ極悪人間、状迄もひへず、此一卷を傍覽有と刃の筈カタツメ抜持て、口をこぢ明
こぢ放し、連判状リョウバンジョウに渡せば、義親ミヤ夫をと立寄、繩付惟弘が、そつこい
と引居スルる其間に爲義押開、一々とつくと讀下す廻文狀、何々叛逆ハサキの張本
太宰タジ師季仲が在城甲賀山カハガと讀終り打黙ハラフぎ、出かしたく、此廻文手に
入こそ、武運を開く瑞相チヨウサヨウと、卷納カミナメ懷中カハし、惟弘勅諫セイボウセキエンの上預る小鳥、義
親の刑伐ケイハツハ、其方に任すぞと太刀を投やりつつ立上り、いざみ進んで入
給ふ。ヨレバ惟弘が續ツヅルて入んも、子細は玄らず、親子三人顔見合せとか

ふ思案に落ざりしが、心をえづめち曙爲義公へ渡せしれ、謀叛徒黨の連判
状、敵の有家も明白に顯へして有上へ白狀も同じ廻文、義親白狀有時は、
斷罪にも及ぬ筈、夫に今太刀を渡し、惟弘に任すとハシテ心得すと眉に皺、
じろりとしたる義親の顔をつくづく曙がニレこあたに一味の將監國貞、
惡の報ひの前に娘や夫が手にかけたも天道様が手引して御成敗
も同し事、聾藏人も内證から、をふぞこあたを助けふと、若倉をふこされ
た志、娘ア成程そふでござんする、をふして成る命が助たさ、心を碎
く我よりと、様もかゝ様も、是程に迄とやかくと心尽の何故ぞ、ちつと
ハ心を改て善心に成て下さりませ、やくと取すがり、鬼に教化をする
ごとく恨つ泣つ親と子が涙に誠を顯へせり、惟弘驗を數た、さ、曙娘何
にもいふああ悔あく、此上あがらへ置あらば、まだとの様あふ覺を取、家
の滅亡斗がたし爲義公の仰に任せ断罪の只今どと、太刀取直し抜放せ

バ 真劍あらぬ木刀へ是へぐと惟弘が暫詞もあかりしがやゝ有て打
點ハナア誠や忠盛公心を籠し此小鳥義親白狀召れ亦べ助よとの志添し
と押戴押直つて袂を包し物を取り出し女房娘此内をよくく見よと指
寄ればあいと取上署がつくド三ツの引肴是へあられもすふしきと
娘も俱にいぶかる内諸肌ひん脱我と我指添腹に突込んだり是へと妻子
が左右情あや何故にとすがり歎を押退突退一息はつとつきあへずシレ
其肴ハナの鶴の庖丁まつかうせよと忠盛公のはんじ物けふ八條の館に招
かれ酒宴の上爲義公へ其小鳥真劍の身を指かへて身代といふ木太刀
の謎某へは其肴三切の身を切と有御賜戴て歸る道日比信する救世菩薩
六角堂へ暇をす死る覺悟の月も日もけふを冥途の門出ぞやナフ義親公
若倉もまだ未生以前の事あれば是迄いわぬ物語爲義公ふも帳臺にて
此身の懺悔を聞てたゞ某武士の家に生あがら若年の比へたゞ劍を見

る事かつふつ叶へず、其比度の軍中に鬨を聞時へ、忽正氣を取失ふ。大
憶病時しも後三年の戦ひ、武衡家衡兄弟が叛逆を鎮ん爲、八幡太郎義
家公鎮守府の節刀を給へり、奥州に向へせ給ふ。親光任が願ひより我
も御供ナせしが何をいふても憶病故、手柄の扱置何をかして古郷へ歸
らん我そぶり、義家公御覽じ給ひ、軍令よ背卑怯者、一矢を古郷の土産み
せよと切て放させ給ふ。斬命からぐ持て歸りし恥しさ、それく思
ひ出せば早昔し、壺井の御前より剛憶の座を定られ、景政の高名兼杖介
兼秩父の妻女剛の座並の羨しくくる日もく此曙は憶病の座に付て
袂で顔を押包、父平太夫國妙殿と泣ぬ日迎ひあかつたれいあふ。其時給
ねる鳥羽のち、夫よ冰といふ字の謎もとけ、鬼切丸の御太刀を持参せよ
との御内通、我憶病の其元は母人のほふ便余り、膚の肝の秘符の業、其云
譯に母人へ其座で自害のいたわしさ、夫々心も剛と成、鬼切丸を携て又

奥州に馳向ひ君の不例も忽々安々歎を討隨へめで度凱陣ましませし
と語るも聞もめざましゝ、^{シテ}義親殿、其時の勳功に、^{カク}鏡の上から預し此惟弘
麒麟も老の手業にて引ぬ弓を腰ふ張、矢とも早く立月日、いつの間に
其様あ悪人に育たと思へば此身の科をかし、慮病の其昔、今切様に其時
に腹切て死たらば、こあたの様あ胴欲あ顔も見まい去あがら臣下の主
を諫て死す、^{サンニ}先祖へナ譯の此生害、又一つにハ忠盛の三切の謎をとい
たりと、こあたを助る此身がハリ娘よ必藏人へ、此由とくと云傳へ見捨
られぬ様よせい心にかゝるハそちが身と、義親殿の成行が迷ひに成ハ
とせふとふしきいた手の歛喰しべる、血沙の涙ぞやるせあき夫の歎に曙
ハ、自述も此上にあがらへて何をせふ俱にめいそとの供せんと刃取手を
若倉が、^{シテ}此夫ハとすがり付なだめるも又涙ある^{ヤマ}聊示めざるあと
進藏人かけ入て漸刀もぎ放し、^{コハ}舅殿早生害召れしあ、君忠盛にハ法皇

頭痛の心惱によつて只今院参^サ付たる其趣、忠節あつき惟弘、忠盛^の胸
中に能察すべし、叛逆^{はんぎやく}に一味の義親、白狀に及び及ばず共惟弘忠死^を遂
る上の義親の罪一等^をあだめ、出雲の國へ流罪^{るざい}との院宣^{いんせん}と、高らかに
呼ひる内、早昇^{かさ}入るあやしの張興^{ばうこう}様先^よ扣ゆれば、惟弘^ハ只嬉しげに死
る今^ハの際迄^{きさ}も、心よかゝるハ義親の、行衛^{いわい}いかみと案せしも、よくも斗
ひ給^さへる物か、それく^く早く用意をといふに義親轉倒廢^{てんとうはい}亡目^{さま}を覺^さし
何々此^ハ義親を流罪^{るざい}と^ハ玄たりく^くと身を悔^{くやみ}、何事も叶^ハぬよあ^ハ、そ
ふじやく、惟弘^が腹切た^ハおれを助ふ爲で有たか^ニ今迄^{せき}世話^{せわ}に成た
上、命を捨て夫程に思ふてたまる夫婦の衆^{まご}、^ハや腹が立たで有ふ^{かんする}堪忍^{かんにん}
てたもこらへてたも^ハ流されて行から^ハ又對面^{たいめん}の未來^{みらい}で逢ふ^{かんする}さらば
く^くと玄渢^{かんの}るれば、^ハ和子^{わこ}、こなたの心が直つたか、善心^{よし}みあら玄やつた
か嬉^{うれ}しやく、^ハ曙^{あけ}聞きやつたか^テ聞^きましたく^く、其善心を今一時^{いっし}、早^は

直して下さつたらち娘娘、と、様の切腹もどちらぞ遅いか早いかで、長い別れに成ましたと、母と娘の手を取合、わつと一度又聲立て歎に盡ぬ涙と俱に心も藏人が袂を乞ぼり居たりしが、傍あひをきつと見付る生首なまくび、親人將監殿まわらど、是はいいかアと驚く藏人、若倉が立寄て、夫おの段々たんごを譯わけ、こりやく娘、其言譯わけ、此親に任せよ、と藏人が僕近くにじり出て息いきをつき、其ごとく形をやがし、小鳥を奪ひ逃出する折も折、夫おと思はず首くびをつゝき、頭巾かぶとを取り、姫殿ひめど廻文まわふみの連判迄、我手に入も天道自然身しも此通腹切つなば、敵討てきとうの五分ごぶんく、藏人了れう簡かんしてかくりやれア、何が汎年來かんげん諫言けんごんやても用ひあい父おが逸徹いつてつ日比ひを思へば惡事ごくじの報ほうひ、何か遺恨ゆいこんを殘すべきと、口くち立派ひさまに云あがら、色目に出さぬ武士ぶしの心こころを斗たたかて、惟弘ひきやうが、愁傷しゆきょう尤つべ、分て大事だいじの此小鳥ちごを袋ふくろに納なめ紐引ひしめ、忠盛公ちゆうせいの志謎しそうをといたる此切腹つな、疎わろそかあらぬ平家の重寶ちやうとう戻もどし申まことと手に渡せば藏人ざうじん取とて實尤じつ、今日けふの先主人せんしゆ

が名代、斯てい果じと立寄て、義親の繩なわをきはさきはさきいイサギ、興へと勧るにぞ
しほれあがらも立上り用意の興おきみ乗移る時こそ有、館の外面そとよりどきのとへからかね
の音かまびすく、殿中響ひび斗たたかふ、並ゐる人々大きに驚思ひ寄あやういかに
と、見やる襖ふつをさつと開、陸冠者爲義公、緋威ひゆいのもへ立、鐵龍頭てつりゆうとうの金兜虎かなこぶの
革かわの尻しり鞆とも太刀たけだ、采配さざはい取て立給へば、數多の軍兵家の旗、白月毛の駒、引立、涉
出陣しゆしんと呼はりく、廣庭に込入たり、爲義辭じきさず馬引寄まひよせ、ゆらりと跨またがり、惟
弘ひろ、汝おのが與し一卷に敵地の案内あんないくへしく知、季仲すい仲が楣籠まいろうる城しろ江州甲賀
山、是れより直に馳向はせむひ、一戦に切靡法皇の震襟しんきんを休やすんせんり、此爲義が一舉
よ有、臣邊が忠死に義親の、臣身の上も安堵あんとせり、八幡殿はちまんどの二代の家督、陸
冠者爲義が此出立みだり、未來の土産みやげみ臨終りんじゆせよと諫給いさめへる骨柄こうがらへ通つゆ、し
く見みへにけり、皆々勇いのち其中うちよ、手負の惟弘はい這寄はまて、義親の誠繩疵じましりの口にしつ
かと卷まき、シテ、ウ遁大將武者ぶりや悦えばしく、シテ、ウ先祖太郎義家公奥州へ近發しんばつ

に父光任が見送し、例を我も見覺たりと門出を祝はんと、扇追取押抜け
ふ出陣の涉大將爲義公、抑十才の初陣に、栗栖山又打向ひ、南部の衆徒
の大勢を終に攻伏返し、花々しき涉凱陣、君も涉感の勸賞に、陸奥冠
者を下されたり、拔季仲が要害、甲賀山の嶮岨と聞、前後の隊伍能守、弓
矢、持楯廻りをかこひ山かげ、谷かげ森の内、むらく鳥の立時の伏勢有
と考るしめせ、拵陣取の第一、風雲龍虎の、習有、春の霞夏の雲旗と見え
がふ山城の麓の岡にたむろして、深田を前に後へ山、秋へ田の面或時へ
水鳥あんどのかけ引有、軍へ奇正を先として、敵の不意を打事へ只、夜軍
に亥くへあし、六轎、七書の教に、万卒を憚て下知よ應する其時へ、譬小
勢の味方成共勝利を得る事、疑あし、委託くすれ恩有、八幡殿の軍略を胸
に覺の爲義公頼てめで度凱陣を待といふ、惟弘へかゝる痛手の今への
時、君の長生末遠き、門出を見るが見納めかど、苦痛をこたへ氣へ張弓や

たけ心の爲義も鎧の袖にもる涙、あやしの興に義親も別れを惜む、涙の袖、若倉ハ將監が首をかゝへてあくくも有し次第をつゞくに夫に見せて泣わぶる圖娘、此親が切腹で仇も恨と姪あいだをし、實もくと藏人が早退立て出雲の國船塲へ送るけいびの役馬上へ勇出陣に、騎を早める鞭泥隣ばんぱかじつたん丁ひくく、蹴上あがめる鎧よろいくり返す、めいどの門出と惟弘が見送り、見返る名將勇士、中に立たる曙が此世あの世へ別れ際とき悦び有、悲しみ有六ツのちまたや六條の館あはれ、哀を残しけり

第三

熊野路くまのへ海うみと山さんとを引受て、漁夫うおふの鰐釣鰐なづるかづつる柵ささの樵きこひてたつき共五穀ごごくあけれど春秋の花や菓こかの畠主はたけぬし、庄屋組中しょうやぐみなかが誘合都ようあの使者のしみ出と、夕暮時の闇ひそかしさ袴羽織はかまはきのかた短地みじかと鼻付はなて待所まちへ、早渉入と披露ひろうさせ備前守忠盛ただよしの執權進藏人家貞旅の用意の挾箱家來引連步寄あゆみいかよかたよ旁承わきよせり

れ、此度白川の法皇頭痛の惱頻々よつて兼々當山權現へ御祈有所に或
夜ふしきの御靈夢、此谷かげゝ年ふる柳の大木有其柳を以て棟とし舟
三間の傍堂都に建立有あらべ病平愈有べきとの告み任せ、其柳を求ん
爲遙と參着せり、旁に案内させ今明日に穿取都に送らん其爲く急案
内仕れと事の次第を述にけり、皆々はつと手をつかへ是へく何事か
と存ました成程お尋あされます其柳へ此先の谷間にござりますナ茂
六、いかにもく、何かい共知ぬ大きあ柳、卅三間の棟にへ體く、したが
あの柳へ何年ぼだいか古木にて、主が有の化るのとテ噂がござります
ミ夫々あの木を伐あさるゝにへよつ程しゆらいがかりませふ、今
明日にへ何としてく、成程左程の大木輒へ切取がたし、併今いふ通
天子の傍用袖人歩日雇あんと一山又觸をあし手柄次第に人を寄よい
か程成共價に構ふ、夫共農業耕の妨みあらぬ傍勅願によつて一宇の

棟に成大木、人歩にけが過のあき様隨分いたへり心を付よ。いざ我も見
分せん案内頼と和かに役義よほこらぬ藏人が仁義を兼し詞へ、庄屋組
中口々々^ノ、有がたい御仰、かやうあ事も所の賑ひ隨分と精出して大勢
人をかけませう、先御案内すさんと、庄屋を先に藏人の柳が元へ急行跡
にハ組中烟主^{はなけ}、^{サア}何でも急^{きゆう}あ御用筋かけ廻つて呼集ふ、達者にさへ有
ふあら錢金の、猶取^{ボシ}角力取の入舟へもしらせてやりや、相^{きみ}へハ茂六人
歩へハ此才兵衛が觸^{ふれ}ませふ、アセハしやとゆふ暮過、立別れてぞ急行爰
に出雲の流人源義親が良等、鹿島三郎義連^{はぜ}謀叛^{ぼんばん}に合謀^{がめ}してけるが、荷^か
擔^{のん}の人數をかたらふて軍用金を乞^うこだめる。此山奥に身を隠し夜ハ山
賊の山道をのつかくと歩出^{あらひ}、今夜ハ何じややらそぶ付て素手斗引
てゐる、まん直しに一ぶくと火燧^{ひのき}こつちり三ぶくつぎ、させろくへて
ねはらばい人松かけに小挑燈^{てぢぢん}くるぞくと咽^のずんぱい上足打て待所へ、

來かしる男が頬かぶり行過るをヨリ待て。其火をからふと聲かくれべ、立
戻りすかし見て、何じや火をかせ、シたばこの火あらあらぬ／＼くへ
させりかたい御法度、火をかす事ハアあらぬ、そりや町中の事云
やれい、此山中で何用心、小言いひらずとかさいで、云かけた無心此儘で
もおかれぬ火があらざ脱ぬけわれやい、脱ぬけ何を知た事とつと、脱ぬけや
い、ア扱あつへ聞及だ岩淵とやらいふ剥はなじやよあ、よふ知てゐるあ、シら
いじや、此邊あたりで噂うばの有追剥おひきはな仕廻まわふてやらふと思ふたが、今夜tonight大事の公
用で柳を切人歩きにいく、こんぞ逢たら覺悟かくごをせいと、いかんとするをヨリ
待ま、われへよつ程骨ほねが有いい、われが様ちやう丈夫ぢぢうあ物もの、幾人いくたでも手下に
付つたい望まねじやと、云つて寄よて帶おびをぐる／＼眞裸まづな、よい褲だらしめてゐるア
夫おもおこせと手を出せば、これ／＼おりや入舟風之助風の助といふて小角すみかど
力ひきも捻ひねる者じや、此褲ふぞくのれか望まね姓うぶある事はア成なまい、何じや見事論の

るか面白い、力の有者へ望所、力だめしじや何と一番出かけぬかい、角力あら好じや何時でも相手に成が見事取か、角力へしらねぞ力で押とひやうまづいたる懷手ふところ、おれも前髪へ有けれど白山新三を見事投た。此寒いに裸はだかに成ての一番勝負賭わetteそくの約束せふ、われが勝たら其褲をほうびよやるは、合點じやと砂をもみ手に打拂はぶひヤくと手合してぞつこい、と聲かけ合はねつ飛しつ四つ手に入、むさう返し腰こしもぢり、相手のぬからぬそれしやの手取、四郎しやうらうの無法むはの力足すが透とおせペ付入得手に入、押てくる身を肩かたすかし、ヨリヤくとあしに廻つてはね付けば、岩淵いわぶち胴骨どうく打付られ起あがも上らぬ高うめきたかうめき、追剝おひはさでも山賊さんぞくでも角力取の一徳にいとく裸はだかに成とこつちの物、此花はなの入舟に下さると着物きものも帶おびも引か、跡あとをも

見ずして逃歸る。四郎はふく起^{おき}上り、腰をさすつて^腰抜^ぬもむごたら
まう投^{なげ}かつた。^{ヨリヤハ}かめ待あがれ、今一番取直せと呼^よべと山道の
かづくりそつくりだくばくの脚引^{ひき}つて追て行跡の「山路ぞ物淋^{まづ}し、谷
の水松の風のみ、音信^{おとし}て、深山へ秋もはへ返り餘寒^よかん雪もどけやらぬ、ま
してや夜^よ猿の聲^{こゑ}、おぼつかあくも呼子鳥^{よぶこ}鳴^な音^{おと}しるべにくる人^{ひと}、横曾^{よこ}
根^ね平太郎お柳^{やなぎ}か情縁^{えいえん}ふかく、母諸共に隱家^{ひきや}を、早五とせと立月日、二人が
中^{なか}又設^{たて}たる綠丸^{みどりまる}に手を引れどり目の闇路^{くろみち}とぼくとかたげし、鍼^{はり}に番^{ばん}
さげて雪^{ゆき}の深山^{ふかや}の山畠^{さんば}を傳^{つた}ひてたどりくる、^{ヨリ}と、櫻^{さくら}そちらの谷
であぶあいぞやこちらがよいと右左^{うざ}手をひかぬれば^ハ、よふいふてくれ
たあ、誠^{まこと}や負^おた子^こに教^{はら}れ、淺瀬^{あさせ}を渡^{わた}るといふ譬^{たとへ}ひの毎日權現様^{ごんげんさま}へ參^{さん}る
道、夜^よのかいをく亡^む目同前^{モウ}月^{つき}へ出^でやしやつたか^{イエ}やつぱり暗^{くろ}いわ
いの、幸^ふと番^{ばん}をおろして鍼^{はり}取^ののべ、畠^{ばたけ}の畦^わを爰^いやそこ、片手^{かたて}に探手^{たんて}にさ

へる蕪の畠土大根取て入つ鍼入て盜とりめの闇あれば綠よ、そこに
あるかよ、といふて探る雪分る草の匂ひに、夫をとて番に入たる獨活
山葵、夜の人の目も嵐吹、松の葉越え出る月の廿日亥中の雲晴て山端白く
澄のぼる、坊よ、誰も來やせぬかと尋ればかふりふり、誰も來やしま
せぬぞ、よいし、誰を見るあらしらせよと、とふて探る畦々に月へさ
せ共しらぬ父縁よ、ここにゐる人へこぬか、見るあらちやつと志
らせしよ、されし見てじやないの、やア、誰が、ヤ、誰でもあり、お月様が
見てじやぞや、ヤン、何といふ、お月様がドレ、と鍼を杖、ふりあをぬけ、
の闇、上から見てじやと指をさす、我子が詞の正直の頭の上に大盤石
大地にさふと平太郎、我身を打伏く、て、ハア、勿体あや恐ろしや、天道様
は、赦されませ、へ、赦させ給へと伏拜く、目見る涙を打拂ひ、貧苦に
せより糧につき縄の畔の作り物、農業の脂を盜、天の冥罰立所に、稚子が

詞を以て天道を、我を禁給ふかと、今身にひしと、思ひ忘る。ハシアソブジヤ、天
に錄あき人の生ぜず、地に根あき草へはへぬといふへ、天地自然の道理
ニ、周の代にハ虞苗の民畔をゆづると聞物を、淺間しの身の成果昔ハ北
面に仕へし武士横曾根次官光當が駒弓矢へ誰又おとらね共、時世よつ
れて心迄深山鳥か苦猿の餌に苦しむ世渡りへ、是が次官が子や孫の、成
行成かと抱寄聲も、忍びのむせび泣子へ辨へもナと、様、何悲しうて泣
乞やるぞ、おれもぞうやら悲しいと膝に毛たれて歎しハ物の哀の至極
あり漸心取直し、誤つたり我あがら、盜取たる番の内、此儘に捨置ペ、枯
凋んも無益ニ翌ハ宰佛の忌日持て歸つて備ん物、願望だに成就致さば、
十増倍にてお戻しや、赦させ給へど、押戴鍼をさぐりて指通し、水母又海
老の道しるべ、縁よ手を引歸らんと、元來し道へさしかゝる、後へ戻る和
田四郎夫と窺指足拔足、烟盜人見付たと、呼ハる一聲恸りに、かたげし鍼を

投捨て、我子大事をかき抱こけつ、轉びつ逃歸る。よい氣味を、おもして、やつたりや恂りして、鍼を捨て逃おつた、殘り多いひつ捕へて、眞裸剥むくつてこまそ物、今夜は、宵から出かけが悪い、是あと徳にしてこませと、番をかけたる鍼の柄を、脚に引かけ、手も、鍼をかたげて手を放した譬を見たと打笑ひかたげて、こそば「歸りける補陀洛の岸を南に三熊野の、九里八町の川端に、里離ある一ツ家へ、横曾根平太郎當吉が、住居老母に仕へる暇に、日毎に三所權現へ歩を運ぶ、留主の宿、妻のお柳へ、獨子を、生し育て五せの、春の半もさへ返り、深山の雪に降雨のしよぼく、髪み櫛入て撫つすさりつ愛盛、綠丸、じつとして結亥やいの、そしてと、様の迎え、坂口迄いてお亥やといひ聞すれバ、アヽ、あのバヽ様のいへ亥やるに、ハゲふり佛様の日じや、山へいたら花を折てこいといふて、有たゞ、夫もけがせぬ様にいておじやと、手を放すれバ、飛でおり、

又雪が降て來た。蓑よ鎌よと取集め、笠をちよつぼり愛らしく雪やこん
こん霰やこんこ洒れや小雪、走ごくらに出て行^{コレ}く、又とべついてこき
やんあやど、立て見送る門口へ、先走が聲として都の使者^{ししゃ}涉出^{よしゆつ}と呼
はらせ、進藏人家^{しんくうじや}貞禮義正しく入來れば、老母も奥立出て嫁の柳も
諸共^よ手をつき敬ひ饗^{むけなせ}べ、威義を繕ひ上座^{うざ}よつさ、此度當所へ立越しひ
添くも白川の法皇の勅令、謹で能聞れよ、過つる年法皇、當山權現へ參籠^{さんろう}
の折から、反逆徒黨^{まぎやど}の族還御^{ゆかうご}の道を庶^{さへ}る所に、お柳とやらん女あがらも
かいぐ、敷^ひ涉^{わたり}危難^{けいなん}を救^{すく}へれし段甚^{はす}敵感^{かんさつ}早速^{はや}涉^{わたり}褒美^{ほめ}の使者參^{さん}るべきに
法皇は不例^{ふれい}よよつて斯迄延引それくと詞の内はつと家來が臺の物
二人が前に並^{ひそ}させ、輕少にハシヘ共、忠盛^{のぶ}の志頂戴^{しどうたい}有て然るべしと懇^{がね}
金の一包^{一つみ}是^い冥加^{みょうか}もあいかゝる山家の垣生^{あはらや}へ、お使者のお入下さ

るとは所の聞へ嫁女是へそあたへ下され物、お受や覺が有かサレバイナと
んと忘てふりましたが思へハ五年跡の事平太郎殿と夫婦に成た其時
しもさのみ手柄といふ様を覺逆へあけれ共上様の危き所を俱々に
お見つぎやた斗よ御褒美といへ冥加あい殊に夫も留主といひキもふや
つぱりお金ハチ、それく、受ましたも同前と母諸共に押戻す、藏人大き
に感じ入、切々かゝる山中ハぶ骨と斗り存たが都に恥ぬ爪はづれ、老母
といひ御子息の心底迄、嘸有んと奥床し、我等進藏人家貞逆忠盛が家臣
万事心かかるゝあと世に頼もしき詞の内老母も寂ハと手を打て、成程
都で聞及だ忠盛卿の御家臣とや絶て久しき都の嘸思ひ出すも涙の種
わらハが夫ハ横曾根次官光當迎北面を戴し、武士にてひひしが同じ北
面の武士、武者所時澄といふ者と弓矢の論の遺恨にて、夫の次官を時澄
が討て立退月も日をけふが即十七年の祥月命日、其時の平太郎も幼少

又有し故、母が古郷常陸の國へ身退き、五年以前願望の仔細に依て、此所へ引越て、是成る柳を嫁に取、綠丸とて一人の孫を設しが、ナウ其時澄こそ悴が爲にハ親の歟討、又心ハおくれね共、若返り討に討れあバ年寄た此母、路頭立が悲しいと仇に暮すも孝行故、此年月の憂艱難御推量下されど涙あがらの物語、藏人横手を丁と打ハッタ扱始より由有人とい存せしが、いかゞも聞及びし、曾根次官光當殿の妻子みてひあ、某辺も此外に法皇の院宣を蒙り、次の宿迄参つたり、所用終らば都に歸り忠盛へも委しく語り、お爲悪うハ計ふまじ必時節を待給へど、聞より老母も打笑て、世に有がたいお詞や、シテ院宣のお使、次の宿迄お出そひ、いか様も義でござります、サレバく右下した白川の法皇、例不列とナハ、頭痛の病、一天の主でさへかかる、脳、通給へず、諸山の祈和丹の典藥、いかある見へざりしが、ある夜熊野大權現、三夜に續ふしきの靈夢、法皇の前生を告給

三十三間堂

七十六

へく先生は蓮花王坊と云し修驗者にて、三熊野に歩を運び、つぬに當山に入て身まかりある、修驗道の奇特によつて、今日白川の法皇と生れました所、前生の其髑髅柳の木の梢に留る、夫故頭痛の心腦頻あれべ、其髑髅を尋求め、王城の東において、卅三間の堂を建、一字の下に彼髑髅納置物あらば忽平癒有べしとの夢の告去によつて次の宿成柳を切、堂の棟に寄附せらるべき院宣こと語るにぞ、扱ひ左様でしかど、黙く母よ驚お柳あの柳を切崩して、普天の下王土よあらぬ所もあし、今日中に切取ん其爲に、多くの人歩をかけ置たり、平太郎殿にハ又重てと、立上りしが以前の黃金再び取もいかゞと見やる向ふの佛壇に並ぶ位牌又手向の露いのぬ色ある捧物さらばくと禮義をのべ供人引具し急行、扱ひやさしき武士やと老母が見送る門の口とばかり戻る綠丸、ヨレばば樹と、様もモツ爰へじや、ヨレ花折て來ましたと、渡せば取て、ドレく、祖父様

へじんせうぞと、睨ぶ母にいさよぬお柳^柳、そあたへ何とぞしたかいの
俄^俄よ顔の色も悪ふ、目に涙が、いへく、ぞつこも悪ふれござりませ
ぬと、目を押拭^ひ拂、綠戻りやつたか、つめたかろく、足あらふてやる
ぞやと、めろりの罐子水いらす、母の佛間へ親と子が、鹽引^{しづき}寄取^よに、櫛折^{はな}
くべしゅろりの傍添乳^{そばそへち}あがらの肱枕^{ひじまくら}、したしむ、中ぞわりあけれ、板^{ばん}も曾^{まことに}
根平太郎當吉、弓矢の業^{わざ}も隠れ笠蓑^{かさみ}、孫晨^{そんじん}が藁^{わら}を結び、老たる母に孝^{そだて}
の道憂^{どうゆう}を深山の苦楚^{くじ}雪^{ゆき}を凌^{しの}ぐで立歸る、お柳の夫を見るとも、^間と、様が
戻らんしたコレ、綠丸、乳^うを放しやいのと、いへそ裏付^{のす}のすやく、^間尉母^{いり}
聞付立出て^は、ふ柳よいわいの、よふ温^{あたご}めてやらしやれと、いひつ、庭に
ヤレ^くけふれ雪やら裏^{みぞれ}やら、瞼^{まなこ}や足が草臥ふ、幸鹽^{たらし}も爰に有^{アリ}、足洗^{あしす}ふてお
ませふと、湯を汲^く入れば、すく、わつけもあい、私が洗ひます、お前^{まへ}い
おりへ、いやく、此母が達者ありや、折にわかへつて参るけれど、山坂

があぶあい迎厭てたまる孝行、殊に權現様の邊にへ一度參詣する者より、證誠殿の階をおり給ひ、三度禮をあさるべし。年月歩を運びやつたれば、權現様のお足を洗ふも同じ事。そふじやあいかいのと、母の詞も理の當然。是へく左様おつしやれべば意を背くも却て不孝、然らば免下されど、差出す足を洗ふ内、表に立てつくぐと様子覗ふ和田四郎、鍬にかけたる番投捨平太郎内、めやるかと、ずつと這入ぞ見ぢらぬ顔、氣遣ひあ者じやあい、是の息子の名ようてた孝行者佛平太郎といふ噂を聞、おれも親が有故、孝行の仕様も見やうし、又女房のお柳へ、こゝら一番のてんとれ、あん亦美しいげんさいを抱て寝るのも孝行の徳じや、おれも孝行を見習へふと、来て見れば有ふ事か、母親み足洗へして、夫でも孝行といふ物かい、見ると聞とへ驕の聲、あんまりで脅がくねる、と高笑ひ、笑ふも構へず平太郎、母の手を取ぬろりの端、たゞこも是にと押直

し、扱ふ世にい物好ふ人も有物じや、もふ其日暮の平太郎、錢金入て、
行乞せぬ、本の足手計の孝行かと存じます、よめた夫で今の様み、
足洗へしてゐたじや迄、又おれが孝行いふて聞そか、春の乗物で花見、
綾や綿子に毛蒲團しかせ、二の膳かの膳かまほと三ツ夫も骨の立ぬ様、
藥研でおろして烹んぜる、何ときつい孝行か、そりや親より窮屈が
らせ、こまらすといふ物、とかく年寄に何事も、氣儘にさすが孝行、今足
を洗をとおつゑやる、勿躊躇あいとへしりあがら、そこをもぢかひず云
状に付のが孝行で有まいか、ヨリヤ尤。そんあらばさまがいへれる事、逆様あ
事でも、用るが孝行じや迄、しれた事、よしく、コレばさま、あのお柳ハ
五年跡から惚て居る、貰て下はれ、よけばさまと思ひがけあき難題、み、三人顔
を見合て鞠果たる斗^{あき}、をふじやい、ヨリヤお柳物をいへぬかい返事をせ
ぬかいやい、笑止あ、平太郎が首が飛ふもしれまいぞと、惡口存外出渡

うだい、聞兼て平太郎ヤアいへせて置バ様々の膽言おほこころごん主有女房むめうぼう無む眞まを云
かけ某が首が飛と何が何とハハハ證據シヨウクを出して首にするぞよヂ夫
見よふ見せいでハと門に捨たる番提ハシタ何と覺が有ふがあとホふり付た
る番の中山奏わさびよ獨活ハツカよ土大根トコロ嫁菜嫁ナキが手前母の前差さし俯うなづて平太郎誤アラカり入
たる風情ハハハ天道アメノミコト正直マサニチ此烟ハハハ主が見る共しらずハハハ小びつちよと二人
連ハハハ夕部斗ハハハじや有まい年々の取溜ハハハ代官ハハハへ引ハハハづつて法ハハハに行ハハハふハハハせいと
引立る手に取付母ハハハお柳ハハハも今さら見すぼらしき夫婦ハハハが心ぞ切ハハハあけれ母
ハ中ハハハを押分ハハハてハハハ待ハハハて下さりませ常ハハハいすんハハハを正道ハハハあ者ハハハかやうハハハあ事仕
出したも露命ハハハを繫ハハハぐ糧ハハハでハハハあいあのハハハどく權現様ハハハを信心ハハハして常燈明
の油代にかあせふ爲ハハハに、ふつとした出來心暖ハハハにも成ハハハたれ巴順禮ハハハや道者
衆の宿ハハハをする故賄ハハハひも出來まする何かにふ自由ハハハある山家住居ハハハ何事も年
寄たばゞよめんじほ了簡ハハハ下されませと手を合せハハハ詫ハハハけれどそんあ

事で有ると思ふた。そんあら了簡してやらふが、お柳を女房にふこす氣
か。そこでござります、あの様にまだ乳を放さぬ孫も有、殊よちつと義
理を有べ、遂うを此義へ、夫もあらぬか。それが御了簡。世間にハ首
代の過料のといふて、金を出して命を償ふ品も有ど。ああたまへそ
なあさましいお金を見て、了簡の何のといふ様あお心でハござります
まいかれど、年寄のくそくといふて見る様ある物の様にと詞のはじめ。
耳^{をはだて}にて何といふ、首代^の金を出すか。過料でせふぞと手を摺^{すり}て詫る傍^{わざ}
から平太郎^ア、其過料をゆて一錢の貯^{たまはへ}が。よいわいの、此母次第^ア
お柳^ア夫^アば、様のおつ志やる様に。お前にハ留主の内都の夫人に
貰^{もら}ふて置た心宛^{あて}や、かましい、盜かやきの分際^{ほんざい}で何の首代、口先でねつ
べりとつべり、手短^{みじか}にお柳を渡せと、立寄足元老母へ頼^{たが}て、備^{そなへ}し包^{ふく}を投
出せば、欲にぎる付黄金の包、取上て^{ヨリヤ}金じや、しかも黄金十枚^さと、始て

驚平太郎、お柳が聞く勅使の噂片頬で金を見改め、どふから出せばよい
物、首代とい不足あれど、是で了簡してこますと、懷へしつかと納め、「^王け
たいあ、忍らふ腹も減たれど、次手に了簡してやると、邊を見廻しのつさ
のつさ心残して立歸る、跡を詠て三人が、はつと溜息つく中に、平太郎身
を悔、非義非道へ忽ち、天道免し給へぬ道理、母人女房面目、あいと後悔、涙
の男泣き、悔しいの道理、去あがら武士の落目に切取強盜、恥に似て
恥あらず、必無念に思やんあ、またも神のひかへ綱、そあたの留主に都の
お使者、佛み手向て歸られしが幸そあたの命の代成程、只今お柳が
物語、拙者も登山の道に見馴ぬ京家の侍達、大勢の人歩を寄柳の本に足
場の拵へ、ヤ何やかやで忘れてぬた、佛前へのお備へ、それく、おかざ
りをとけそくにかざる粟の餅、是も貧女が志佛間みこそ入にけり、お
柳の添乳を漸と軒端の雪の風寒く餘寒を凌ぐいろりの火、お神酒の余

る燐鍋に温^か入^るてこてくと盃のせる丸盃も心有げに携出^{なづさへ}。ナ平太郎殿、お前が日頃の孝行が神佛へ通^つせし故、思^ひぬ金を貰^うふといひ、災難を遁^{のが}るゝも、皆信^{むす}と孝行の徳、あの綠丸も成人^{せいじん}して、お前に孝行仕^むやる様^{よう}あやからせて下さんせと盃を指置^{さし}べ。是^はへく改^{あらなま}つた事^{こと}いやる、おたがおれ計^{ひら}じやあい、そあたも隨分長生^{ながなま}して、孝行にして貰^うふといへばほろりと涙ぐむ、顔をつくづ打守り、是^はへ扱^{あらは}そあたへ何^{なん}が悲しうて、其目元^{のまぶた}の其涙^{なみ}い、やや、是見やしやんせ、綠の寝顔^{ねぎおほ}の愛^{あい}らしさ、つぬ思^{おも}はずにポンコツたへぬもなふ寝てゐる、したが綠計^{ひら}じやあい、おれを山坂をあるいた上、色々と氣をもんだりや、とふやら迎^{むか}が來たそふあ、ドレ一ツ呑^のかい、丁^つを受てつとほし^{ごりや}坊よ、母上の「ふ頼^{たの}じや、とよ」が孝行にあやかれと、寝顔^{ねぎおほ}へちよつと戴^のかせ、そあたも一ツのみやいあふ、あいと取上押戴^{いたぢ}。此様^{このよう}あめでたいはかあい事が又有ふか、よくはかあいと、何^{なん}がはか

あい事じやいの、さればでござんす。お前の留主にかへつた咄を聞まし
た。そりやせんあ。咄じやそれ聞ふ。サアまああの、くづんと云兼る咄
じやが、何ぞ指合あ事じやあいか、母者人へ奥にあり、何のおれに隠す事、
サア早ふいやいのといへ共夫と云兼る胸の思ひへ目にもるし涙見せじ
と身を背け、漸胸を撫ふろし、ア、咄といふ外でもあい、谷かげに生立
し柳の一木の其傍に、大木と成た柳の木と女夫に成てゐるといあ、夫
が何とやむたかいの、サアまあ譬ていふ時、柳の木へお前柳へ私かふ夫
婦に成て居れバ、取も直さず連理の中、お前に譬た柳の木は早佛果を得
て、今人界に生を受、又女の柳へ、今に非情の果を離す、假に人間に交りて
夫婦妹脊のかたらひに、一人の子迄設しが、國王の御爲に母の柳へ切崩
され、消る命の惜ね共馴染重し夫や子よ別るゝ事が悲しうて此胸を裂
様を、夫が悲しいくと語る、聲さへかきくもる、平太郎何の氣も付ず、夫

ハ笑止あ咄じやが、そあたハ何の構ハぬ事、其様に泣す共よいわいの、
夫でもよふ似たお前とわたし、あの子の寝顔を見るに付、身につまされ
て悲しさに同わつけもあり、そんあ、咄りおいたがより、さふやらふ
れも胸つはらし、アわつさりと最一ツ呑ふ、北の方つぎ給へ、酒さけの愁の
玉簾、今様あ哀あ咄、熊野の浦へさらりく、さいつ押へつ汲くくかひす
妻が思ひ露えらぬ、夫ハ肱を手枕のうたゝよ、夢や結ぶらん、妻ハ傍を
立退て、奥を覗つ立戻りおづく、傍へ立あがら、申我夫といへど寝
付の高剣風が持くる斧の音、伐木とうくとくと木を伐音や、こた
へけんお柳の身節びつくびく、苦しき胸を押へる涙、じつとこらへて立
寄、得も岩代の結び松我の柳の綠子が顔を詠つとつ置同、ふじや
待志ばし、互に顔を見て居て、中く語るもおもはゆし、必夢とおぼさ
ずと、白地に聞てたべ、我こそ誠の柳の精、雨露の惠に生育かやうに夫

婦と成事も一方あらぬ因縁そや、今餘所事に云あした咄々皆互の身の上、先の生にて繋たる契りを結ばん其爲に、仮に女の姿と變じ、柳が本に待受て夫婦と成しも五ツをせの、春や昔の、春の比季仲か鷹狩に鷹の足緒のかゝりし時數多の武士に切崩され既に枯あん其時に、お前が一矢の手柄故鷹を助て葉柳の枝にさへりもアレバ、又もや爰にちりくる葉へ我を迎に来るかと思へやる方證方もあくへ震ふ膝の節押亥づめ亥づめ、其時の情の恩送る月日も重ありて、柳の花の綠丸かとあしうあつたれバ乳があくとも育べし、成人の後より父の弓矢を受傳へ潔い名を上てたも、コレ母ハ今を限りにて、元の柳に歸るぞや必草木成佛と回向を頼、夫よ子よ離れたあや悲しやといふ聲さへも、忍び泣忍ぶに餘る身のつらさ、名残惜やいとをしやど、立て見居て見聲を上わつと斗に、伏轉ぶ音に目覺す平太郎、扱へ夢共現、共聞しハ誠で有けるか何とて難面や

るべきぞと抱留れべ一間の老母を俱に轉出様子へ聞たコレお柳嫁女ある呼聲もぢりくる柳の葉隠れに形へ消て失にけりそことよ爰よと母と子が尋る音に綠丸かゝ様ぞてへいかしやつたと父が後にかけ廻りか様いのふかゝ様あふばゝ様呼で下されど庭におり立門に出尋迷ふを見るつらさ父も思はず聲を上綠が母よお柳やいかゝ様あふ嫁女と聲をはかりにしたへれて又もひかるゝ執着心形へしをるゝ青柳の母の姿と綠丸かゝ様と嬉しくも立寄すがれば嫁女か女房あるかと立寄て、非情の草木と云あがら精有バこそ是迄に睦しくも馴あじみ一人の若を設し身が何とてふり捨歸りしそせめて母人を見送る迄俱に介抱してくれよと託歎けべ漸にしほるゝ顔をふり上で傳へ聞安倍の童子が母上も丁と我身と同じ事一人の子を残し置信田の古巣に歸りしとや夫へ野干の年ふる身我へ元來草木の歸る古巣の柳の今伐崩され

て枯柳歸るといふに消る身に何とて形を残すべし、白河の法皇の浮懶
頻とて都の使來りつゝ、我身を切捨ゆく、斯て姿見へあがらもはや朽
木も時を得て、一字の棟と成事も。一ツへ妙ある法の縁、逢事稀にうごん
げの、花物いへぬ草も木を、王土に住バ是非もあし。今夕佛果の身もある
も夫の先き生柳の木の、佛果に連し縁あれば情の恩を報せん爲、一ツの
籠を參らすると、平太郎が手に渡し、夫こそりかけまゝも、白河の法皇の
前生の浮頭へ、夫を手柄にほ身の上再び出世をあし給へ、必々縁が事、お
頼や參らすと、夫の顔を見て、涙、若を引寄抱えめ離がたあき輪廻の網、
アレく風の音に連襷の糸を切拂ふ斧鉄がてう／＼、眉の爰又玉きわ
る時こそ來れいざらば／＼の聲の下姿へ見へず成にけり、不便
や憂を綠丸かゝ様に又いあ玄やつたかヨレかゝ様と呼たけり、かけ出て
れ、かゝ様あふ／＼と足摺し、辨へ玄らぬ稚子を膝に抱て平太郎、母人

我よりへ此若が愛着に引されて、嘸や名残の惜からん、譬姿へ見へず共
柳の妻が亡餘、今一度此縁に見せもし我も見もしたし、藏人とやらんに
も對面せん、母人よへ此髑體、佛間へ直し下さるべしと手に渡しおよ
縁と手を取べ、かゝ様呼よいのかや、おりや、乳が呑たいわいのふ、
道理じやく、可愛やと涙隠して二足三足、深山隠れの山寺に入相告る
鐘の音、かぞへあがらもそろくと、探る足元見付る母、ヨレ平太郎調、そあた
へ何とぞ仕やつたか、アいや何共夫れでもいかふうとく仕やる、ヨレば
ば様と、様の目が見へぬわいのふ、ア、そりや、ア、いつから、アさればで
ござります、一月余り、ふとどり目が發りましたが、斯とナシバ、嘸お案じ、
お心に障らんかと、女房に云、是迄へお隠しやたが、夕迄、女房が引取
て介抱して、ア、いやく、お氣遣ひあれます、すんとよふ見へ生する
といひつゝ探るを見せまじと思ふ心ぞ闇のやみ、シ、と、様こぢら玄

やと手を引孫を見る母も涙隠して跡に付^{アツメテ}、ナシ、母様何にもお構ひ
あさるゝあしたがおまへ様も此坊めも今夜から廻便りが^{アラ}、そあたり
猶の事、おれもがつくり力があり孝行にしてたもつたお柳、最一度逢た
い禮も云たいよしあき老の長生して憂事を見る悲しやと親子手に手
を取かれし泣涕^{クモリ}こがれ歎しい理りとこそ見へにけれ、外へ二月の雪空
につれて寒さもいや増る行燈の火を挑燈^{チヤウヂン}にうつし持たる綠丸簾^{スリカツル}よ笠
よと、打着^{キセ}て然らば參つてさんじまよ、怪我せぬ様に、縁よ手を引、あ
いあい／＼、あいろへ見へぬと/or目^{アヅカ}の父杖^{アツス}の我子を力草、柳か本へとた
そり行、母^ハ佛間の看經^{カンキン}よ、家の忌日も嫁が日も俱に回向の發願以鉢^{イハチ}も
幽^{カク}に六字誦^{ロクジヌ}南無あみだ佛／＼風も身にしむ黃昏過心の鬼の和田
四郎^{アラ}畫^{アラ}の街の兼てより、夜^ハ山賊^{ダラ}の大膽不敵何でも壩出しがこためん
と大だら指足^{シカ}覗^{ハタム}ひ足^{シカ}しつく^{ハタム}疊^{ハタム}の物音に誰じや／＼と聲すれバ^{アラ}苦

しうあい盜人じや、ヤと悔り玄あがらも立出る道の母イマ折角はいらも
やつても見こみのあい此内内了簡していんて下されイマコリヤばゝおれじや
顔見いと頭巾キンを脱ハサフ共見玄らぬく。・ハテ・アラ・アラ・アラ
書きたといやるからハ扱ハサフハ書のも、・ハテ・アラ・アラ・アラ・アラ
驚けべ、山家のとろくよ似合ハシマツ、黄金十枚ミナガタのよい仕物、まだ臍ウタカくりハサフ
有アリであら、有アリたけそこへさらへ出せ、命ミツバチハ助けてくれふぞと鯉口ハマグロあらし
おさしける、・ハテ・アラ・アラ・アラ・アラ・アラ
太郎タロウハ戻らぬかと、表ハサフを詠ハシマツつ奥アマを見つ、心ハラをいらち身カラをあせる、・ハテ・アラ・アラ
出しふるまい、搜ハサフしてくれんとかけ行ハシマツを、そふハサフさせぬと取付手先ハサフ
放し、蹴飛ハサフしくのつかのか納戸ハサフを引出す古葛籠フジラあたふた明て手ハサフみ
たる親子が着ハサフがへに包んだ大小ハサフ鮫ハサフの鼠ハマグロがまだ外ハスカに御明上ハサフた釣ハサフおまハサフ
備ハサフし、觸體ハサフを見て悔り、そこやらぞハサフがみ立退ハサフしが打默ハサフいてコリヤばゝよ、ハサフ

籠に刀が有からへ浪人ふ極つた。あの晒頭の誰首で、何の爲じや夫ぬ。
せ、あれの大事の物く、其大事がる譯聞ふ、あれの息子が出世
する大事の物じや、何じや出世する、其出世が猶耳より、一應でいぬ
かすまい、必ず開ざ成まいと段平引抜是じやがと突付る、これあぶ
あいく、と追廻されて踏はづし庭へとつさり、落ても逃ても問ひぬく
と、追誂られてかぶりふり、ずたく、又刻れてもいへぬく、ハチがぶ
いひべり骨、いれせいで置ふかと、命もあら繩見付出しかんぢがらみに
ぐるく、卷見上の燈籠の釣繩はき、結び付たる猿縛り、サクぬかせく
ぬかさぬかと、いふてひつばる釣繩にしめ上られてかよひき體、次第
にしまる縛り繩、血筋赤らむ、薦楓命のつるぞ危けれ、もがくへく。
情の剛い根性から痛いめを見おるへい、下れ滑の溜り池冰の地獄ぞや
サクぬかせくと責せつてふ、老母の苦しさ聲も出ず、降くる雪も争白鬪。

かもじはとけてばらくく、斬にしたふ、血の涙、見やる向ふに挑燈てぢらんり。
あむ三寶人かげどと、繩を放せば、眞倒まうとう水の溜りへおうちちのむざん、感
ける次第へ道の四郎も狼狽わこうばい、眼、表へ逃んも一筋道、やり過して行んずと。
庵の庭いんてい、身を忍ゆく、斯かとらしらぬ平太郎、案内へいつも我門に、常燈明じやうとうめいの
光りさへ挑燈てぢらんの火、又綠丸ろくまると、様、佛様へとぼした行燈が落て有アリ、
れくと探り寄よせ、こりや落て有アリしきくと門の口、母人おやじん漸今歸り
ましたば、さん坊も戻つたといへど答こたへもあら笑止わらひしや、門の溜りに水の
音、綠よ明りで見てくれと、詞の内に透し見てさすあれくば、様が池へ
はめて有アリいの、と、悔り廢亡ひきなほ探し尋る手先へさゝる繩引寄じよひき、誠に
母のうめき聲こゑ、何者なにものが所爲なほどと、繩を力ぢから、親と子が漸にかづき上のぼく
申母者人おやじん、ば、様のふと撫なでされ、體からだの冰ひょうと冷ひや切たり、こりや何とせう
とふせうと、かけ出して、かけ戻り、立たり居たり氣きの半亂はんらん、虛空くうくうを、撫なで

とくよて、かけ出れば綠丸と、標はまつて下さんあとすがり歎けば、趙
りよせ、よく目が明たい開きたいと、り目に何の因果ぞと、母に取付、身を
もだへ聲を斗に歎しが漸心取直し、ハッソふじやく、水に溺し體にハ蘿
を焼て温れ巴再び息を返すと聞、それよくとて、親が指圖より箋をか
き集め、蠟燭の火を指寄て、心を焦す、烟さへ、若も返らせ給ひずは是が赤
來の燒香かと、口に念佛片手にハ我身を添て温鳥蟲く體に立かゝり、食
し水を、いやく、現在の親人に、足でハ呑ふも、さへいへ水を出さずも
ハ忽苦痛を助る爲免させ給へ母人と戴あがらぐつと踏出す濁水手足
をあがく其風情嬉しと斗耳に口、母人申母者人平太郎でござります、ば
ば様あると撫廻し肌身を添て呼生る、心が心に通じけん、苦しき息をほ
つとつき、平太郎か遲かつた綠いそことに探る手ふすく、お心が付ま
したか、ヨリヤマ何奴が此所爲名へお聞あされぬか、何者とい、書きた奴か

何をおつさやる、晝の奴とひよ、切り銜で有たか、よいく、お氣を體に
や、綠を傍にありまする、二人のまめあが嬉しいく、孫が顔ももふ見
へぬ、平太郎さらば、孫よく、さらばと斗此世の名残其儘、息へ絶にけり
ア涉臨終じゆりゆうか、南無あみだく、綠よ可愛かわいやモウばゝ様も死しやつたと、大聲
上て取亂せば、綠をおろく立騒ぎ、ばゝ様あふばゝ様とむあしき體に
打もたれ辨わきまへ涙、親と子が心を思ひやられたり、様子をとづくと和田四
郎後に立てせら笑ひ、ばゝめへくたべる、爺めへ眼がつぶれたあ
と聲を聞より平太郎、そふいふへ晝うせた銜よあ、有がたい添い、母人
が是討と有手引成か、綠よとへ引添ひきそて、アくこいと身縫みとふコリヤやん、あの
臍頭へ大事の物じや、われに出世さすとぬかした故、おれが出世をせう
と思ひ、様子をとへをぬかさぬから、あのざまよしてこまし、うぬを小
憎せがれが不便あら、有やうにアぬかしあがれ、何をぬかすうぬ晝の金に味を

得て、よふもく母人送、胴欲あめに合したる、綠よ刀を取てくる、此手を引と行先み立はたかつて動くまい、其大小ひつさらへ爰におれか特てゐる、是がほしいかほしくば、サぬかせ、ぬかさ、是じやと引き抜大だら、突付くひらめく刃先、目前へ見へぬ眞の闇、これいと綠丸刀に恐れ逃廻るを、引摺で小脇よかゝへ、此小びつちよからさいももか、但しぬかすか、サ何と、人質取たる手詰と手詰、と、標とれいと悲しむ聲我身にこたへ肝先へ突通さる、思ひ子が命大事と手を合せ、聊爾せまいぞコレ、そんあらぬかすか、いやあらつこか、ゑぐろか、サヤとふぞ、伴をキあらぬ、助てほしくバ早ふいヘ、サナます、サぬかせ、目が明たい目が明てほしいあ、南無權現様、お柳やいと、様のふと泣綠、おとばね立ると串ざしじやと、鋒指付サ、とふじやくとせちがふたり、叶ひぬ所と、平太郎、サく駄へをうを助てたべ、何を隠そふあ、御頭、白河の法皇

の觸體にて渡らせ給ふと、皆迄いへせずモウよい、つぬ一口にいへるゝ事をよつ程憎をしぶとい奴ヲヤがきめをこますと投やれば、親子か嬉しさすがり寄溜息はつと、つく空み鳥の羽音二聲三聲、雲間をさして飛を行、其隙に和田四郎觸體を小脇にしたり顔、白狀をひろいだ褒美是をくらへと切付る、かい沈で身をかへし、利腕撃バコリヤをぶじや、うぬが眼へいつの間に、開いた段か蟻の這迄見へるゝやい、そんあら生てハ合點じやとはズみを打て引かたげ、池の深みへ、頭轉倒、直よ刀を脇バさみ、尻引からげつゝ立たり、とゝ様強ふ成たのど、いきく悦ぶ綠丸坊、太切あ此觸體大事にせよと、しつかと渡す後の方、され共我武者の和田四郎這上つて又一打まつかせ受たる鎌のほろ、かふ目が明バ百人力、山賊ふぜいの齊等々刀を當るゝ刃の穢、うぬよ似合た鎌の刃先、老母が歎觀念せいで打てかゝるをはつと受、ヤ身を山賊との片腹いたし、源義親公

よ譜代の家臣、鹿島三郎義連、此程迄の都に有しが季仲の謀反よ組し、軍用金を集ん爲山賊夜盜ハ仮の渡世、和田四郎が手にかゝると思ふも、源氏の武士が鋒に苦猿めらが命の宿がへ、一そつ首あらへんと廣言たらだら付入さそく、こあたも弓矢ハ手練の若者請つ流しつ切結ぶ鎬を削る雪吹の空囊交りの雨の足踏すべれハ踏留り組つ轉んづ拂ける平太郎ハ多年の誠神や力を添ねらん、切伏く乗かより、縄が爲みを當座の敵と指添渡せば抜持て爰をちよつりかしことはつり松の木丸太の手斧打、大の男をへろり切よいハくとて、親がどいめをぐつと指通し、嬉しや敵ハ討たりと死骸を池へ踏落し、悦び勇親と子が暫り息をつきあたる既に更闌静りて影があらぬか、縁が母、同平太郎殿、今母上のほさいでに苦痛有しハ先生の業苦を見せしめ給ふべし身多年の孝行と信心の功德により月日の兩がん明らかに、敵を討給ひしも大權現の神

勅^{テレ}、此事疑有あらば、肌^{ヒツ}の守を見よくといふ聲斗聞ゆるにぞ、實^ミふしき、我兩眼、いまだ八聲^{ヤシキ}の鶴^{ハク}よりも鳥^{カラス}の鳴音^{ヒナギク}を聞しより、ふつと目の内涼^{チリ}しくて眼前敵^{アサシ}を討たるを偏^{ヒド}に神^{カミ}の加護成かと懷^{カハラ}中の守^{トモ}午王^{アワタケ}、取出し能見れば、數多^{アモリ}の鳥^{カラス}のかけもあく扱こそ大靈^{オカル}權現^{ノミコト}の、ふしきを見せしめ給ふかと、肝^{カミ}よめいする折^{ハタ}もこそ、又も羽音^{ヒナギク}い悦び鳥^{カラス}飛連^{ハタハタ}、目下^{マサニ}開し紙^{ハタハタ}の忽^{タチ}ス元^{ハタハタ}の午王^{アワタケ}と成にけるかゝる奇瑞^{カキ}瑞^{カキ}を三熊野^{ミツカミ}の午王^{アワタケ}の威德^{アハラ}末^{ハタハタ}の世^{ハタハタ}に、門戸^{アラカニ}に押^{ハタハタ}て盜人^{トモダチ}を防守^{アシガタ}ぞ有がたき、早東雲^{アハラカニ}の街道筋^{カイダラ}木^{カツ}やりはやして地車^{カツカツ}の轟^{カツカツ}く音^{ヨロヨロ}すいさましや、和歌^{カタカタ}の浦^{カタカタ}よいとあ捕^{カツカツ}のゆかた現^{カツカツ}ニ玉津島^{タマツシマ}三^ミにさがり松^{カツカツ}四^{ヨリ}に鹽釜^{アリヤコツヤハ}よいとあ捕^{カツカツ}のゆかた架^{カツカツ}頭巾^{カツカツ}件^{カツカツ}の柳^{カツカツ}を引^{カツカツ}おろししめらにかけ手木^{カツカツ}にかけ漸爰^{カツカツ}に來しが俄^{カツカツ}み車地^{カツカツ}にすりゑいや聲^{カツカツ}して人歩^{カツカツ}共^{カツカツ}入舟^{カツカツ}が來^{カツカツ}やりでを跡^{カツカツ}へ^{カツカツ}すさり^{カツカツ}すも先^{カツカツ}へ行^{カツカツ}ぬぞふしきなる警固^{カツカツ}の武士進藏^{カツカツ}人心^{カツカツ}に黙^{カツカツ}き思^{カツカツ}ひ當^{カツカツ}る事^{カツカツ}

そ有せくあ／＼とせいする所へ、身^{さし}拂^ふして平太郎綠を連て出迎ひ、子綱
の夜前の對面^{ならめん}、老母が身の上有増語り、刲^ハこそ此木の動かぬい、目前觀
子恩愛^{おんあい}の別れを惜むと覺たり、妻が靈^{れい}をもいさめる爲何とぞ綱を此憐
え引^ひさせて給^はらバ有がたからんと願ふよぞ、實尤^{じつゆう}の涉頼^{渉頬}、何か違背^{るは}
いん左様^{さうよう}あらば此柳^{このやなぎ}、新宮の濱^{みさき}前迄^{まへ}跡^{あと}の海手^{うみて}を流さんと、錦^{にしき}の袋^{ふくろ}を手み
渡^{わた}し、頭^{かぶ}を是に包^{いざな}れて平太郎殿^{ひらたろう}へ一子^こを連跡^{つらひ}上り給^はへかし、我^わへ先
立法皇^{りは}へ此趣^{ことのまゝ}を奏問^{そうもん}せば、身の願ひ立所に曾根の家^{そね}を引起^{おき}し、父の歟
時澄折^{ときすみ}を以て某^{もの}が宜^{よろ}しう手引仕^{てび}らん、一刻も濱邊迄^{まへ}御用意^{ごようい}と勧^{すす}められべ
残る方^{かた}、あき御懇情^{ごんじょう}添^{そな}しと一禮のべ用意^{ようい}迎^{むか}も此儘^{これまへ}と綠諸共立かゝり、木
やりかんぞい父^{ちち}が役^わかざす扇^{おうぎ}もしぼれ聲^{こゑ}、むざん成か^な稚者^{おさむすけ}へ、母の柳^{やなぎ}
を都^{みやこ}へ送る、元^{もと}の熊野の柳^{やなぎ}の露^{うる}に、育^{そだて}上^{あが}たる其綠子^がが、ヨイ^{ヨイ}ヤヨリヤ^{ヨリヤ}、これやお
れがかゝ様^{さま}かと、綱引捨^{なげ}てわつと泣^{なみだ}、最一度乳^{ちの}へ呑^のれぬかと、縊^{くび}歎^{くび}べても

親の涙に聲も枯柳枝に流るゝ血汐の涙是や目前哀別離苦動くもふしきはゝきの草木心有べこそ引げひかる恩愛の孫よ／＼と夕べ遠いとしがつたる老母さへ今へ子しらず親去らず道の街に葬らんとかき抱たる孝の道忠義に厚き藏人がいざめて歸る都の土産柳と柳と鞠りたる連理返りや楊枝村女夫坂迎今を猶、いひ傳へたる物語憂を深山や三熊野の柳の棟の由來の實此因縁とえられたり

第四 道行親子の友衛

爰より哀をとやめしハ綠丸が父上あり妻にも憂を三熊野の谷の柳のいどし子を跡に残して消失し母の柳も今へはや都の方へ引牛の棟とあるも法皇の詞もおもき親と子が御頭を包さし荷ふかたと肩とに置霜の白き髑髏を道連に母の棟の跡したひ都の空へと思ひ立心の「内ぞ物憂けれ頃へ如月月末つかたまだ山々に消殘る雪へあれ共母と呼妻共母

で青柳の枝葉も俱にちりぐの今へ籠の緑丸思ひ出して立とまる。
住家を跡に紀の路の海もはてあし坂の松檜杉の木立にむら鳥かへい。
かはいと鳴聲も我が哀を友泣にすめ伴ふ稚子が石を拾ふて石あと磯
打や現かうつとりと父ハ歎み氣もとぢてそゝろ心のけらく笑ひ、
れ共觸體ハ大事そとかたに引かけ先に立都へ還御の御幸道御先を拂
ふ警固の武士横曾根次官が一子平太郎が御供や車ハ我が肩車、
ひ出たり漢王ハ李夫人の別れを悲しみ甘泉殿の夜の床、夫人の姿を畫
うつし九花帳の内にして反魂香を炷給ふ其傍ハ有あがら物をいれね
ハ笑ひもせずましてや我も其ごとく妻ハ非情の柳の精、わら心あやつ
れあやと往來の袖にすがり付うき事の數々を見給へや人し春ハ梢
の花とのみ心を寄て短夜の時鳥雪見草淺澤の杜若あやめ卯の葉も枯
失て萎もうすぐかこち顔ある我涙落葉時雨に濡初て我あがら恥かし

や、百夜千夜のあじみかや、谷の柳の年ふりてまして雪霜いとひあく、一
夜を待て消失し、妻故に物狂ひああたへ走こあたへ走、アレバ妻へ爰にと
指させば俱みすかりて綠丸かゝ様戻つて下されのふ、レとゝ様と聲立て、呼をさけべど其かひもあびく梢へ吹乱れ物も岩根の苦むしろ、木の
根を枕に親と子が勞臥こそ哀あれ實恩愛に、ひかれくる母が姿へ幻に、
道理あり、去あからさほぞ心を乱されて、綠も何と成べきぞ、最早心
を取直しとくく都へ入給へ道のあいとゆふしでの神隠れして失
えけり、親子へふつと目を覺し、ふしきと見れど僕の草葉に残る露斗り
夢か現かいつの間にあべのゝ道も遠里や小野の古跡も早過て、難波の
春邊あたゝかに、野もせ堤にさいたづま、赤央柳の綠丸さきに立てへ打
まねく、跡に父が呼子鳥、空にへ越え歸る鴈、今そ都の雲に入、鳥羽の近
道はゝきの見へつ隱れつ數行、人こそしらね神垣の大内山にぞ「着に

けれ人いひき苦へ色かへぬ松原を引もちきらぬ物詣六角堂の御縁日
往來の人を拂へせて進藏人家貞跡に續へ横曾根平太郎當吉、綠丸諸共
に昔に返る花の袖、肩衣袴大小も遠内裏の北面に住へし父が本領に今
日安堵の參内遂打連歸るぞゆゝしけれ、ノウ藏人殿法皇の御頭へ先立て
差し上冊三間堂の棟上も早明日と承ひまる、某も熊野にて別れたる老母
が追福、昨日迄も明けへば不淨を拂ひ服を改參内し、横曾根の家を起す
べきとの縁旨頂戴仕り以前の武士に返る事偏に貴邊の御取成是々普
請の場に立越、忠盛卿へも今日の首尾や上あべ無御安堵、此上あがら一
ツの願ひ、父が敵武者所時澄、年來の齋憲さんする時節と存ずれば、此
義も宜しう御斗ひ下されよと頼めば藏人打點き其義も主人忠盛へ達
て願ひし所、右冊三間堂御普請の其間へ法皇始奉り忠盛も精進潔齋、其
上に非常の大赦を行ひれ、罪有者の命迄御赦免有も彼堂事故ある成就

あらせんとの結構、何事も落去の後此藏人が指圖して、御本望へ受合す
と事を分たる家貞が詞を聞いて實尤、何かの事へともかくも貴邊の心に
任すると、互の挨拶退屈して、コレと、様、かゝ様の柳の木に逢そうといひ
しやつたてんあ、美いべし着たのをかゝ様又早ふ見せたいと、悦ぶ顔を
見る父の胸迄ぐつとせく涙、心を斗る藏人家貞（明）、玄ほらしや健氣又も
出世の身を悦んで見せたいと、自然の孝行、則柳の枝を以て一千一軒
の佛像を刻れ、彼堂に納給ふ大願、枯たる木又も花咲どかやうある道理、
子何かいふ間に時移る、いさ同道と打連て急舟三間堂普請場として伴
ひ行跡へしとく、四枚がた、前への看板醫者乗物、人松かけに昇居れば、
町との見へぬ、絹被綾が付鉢乗物、是も木影に立さずれば出迎ふ多熊法
眼、と、またの忠盛の御臺所、池殿御前立出給ひ、是へく能所で逢ました、
ハ成程拙者も是より直お館へと有る所、シテ彼方の様子へと、小聲にあれば、

されべいの、先達ての療治によつて右の姿すがたと仕裸しきはだシガマがシガマ聞て下さんせ
腹か立ふか立まいか忠盛殿の種たねを孕はら五日跡よ輕産けいさん、しかも遲おそしい男の
子血こけつの上の事あれば目まひでも出よふか、悔うれりても召めしれふかと思ひの
外ほか常つねよりは結句氣合けつくきあもよく、あの手てではいいかぬ故外ゆゑに仕様しうがえ、成程せいじゆ又
其上そのうへ我等われらが秘方ひほう家の秘藥ひやくを一ふく呑のさばころり山樹さんじ產うぶ後の上目うめ
ひも見せずついべたく、法眼ほうげんきつと請合うそあくしたが太切おほきる藥料謝禮やくりょうしゃれい
にハ金子百兩御合點ごうてんかと弱身よわみへ付込ふづら歛頰らんくへ疫病神えきびやうじんより醜うし、御臺ごだい
點てんきてん合點ごうてん、夫おなよ限かぎつた事かいの、自あが胸むねのはむらむら瘡うずきさへ直ただる事ことあら
ばと邊あたの人目ひとめを憚はばかりて夫おなといへねねを呑の込法眼ほうげん、然のらば明日あさひお見廻みまわす、
んあら必待ひせいます、幸さい明日あさひの御堂ごどうの棟上むねのう忠盛様ちゆうせいようの留主りゅうしゆの内うち夫おなも合點ごうてん、今
日にハ六角堂の縁日えんじ、隨分さうぶん七しちの廻まわる様參詣致すさんじゆ、ああたににふ下向おとむかかと、
目めと目めで多熊法眼たくじゆほうげんの乘物釣のりものつりせ別れ行跡こうせきを見送る池殿いけどのの心こころにしらぬこじらぬ嬌こじら

の衣江きぬの中なかもべれんそう、此間このまの祇園女御の御安産さんの奉禮參り清水
から六角堂御深切しんせつる御臺様、夜晝よよお仰おあがのお氣おきべらしべらしからん殿でん、ちとお
ひろいもよからぞやま夫めく片語かたごつた屋敷やしきを出て町まちをあるいたり
や、厚髮あつひん男おとこをたんと見て目の正月まつゆくをしたわいの、イヤ厚髮あつひんより惣髮そうひんの法眼
殿でん、此こおいやま氣きに入はたにがみの走はしたあの顔ほほが癪きずにはすんと妙藥めうやくやら
みだい様まだいようの相醫者あいじやじやと様子ようしょ白齒しらきが追蹤ついせう口池殿くちでんも打笑うちわう給さへひ、いか様心ようじん
を晴はらす爲ためそろく歩あるひろんとの紺くわんふ折くたつから向むかふと双紙ふたがみの鑑かがみに
脣草履かぶらふりかたびたる一文奴子いもん供童くわうよはやされて、彌正平みまさひらく京きょうの町まちの
彌正平みまさひら振ふたる鑑かがみ何なに、羽熊鑑はくまのかがみ鑑かがみ大鳥毛おおとりけ、小鳥毛こどりけ、花はなの國入くにいりしつかとせい
合點あてだくまつかせろ、みの取とり抜ぬきたりさいたりせまいか、晚ばんの泊とまり
呑のだりはつたりしてこめさ、是れも懸路けんろの手管鑑ててかがみ鑑かがみお望次第おぼし、持鑑もちかがみ
だて鑑かがみ玄あやく玄あや鑑かがみ、やりばあしの家の藝げい、だい笠立だいとう笠かさがんがさ迄まで、ふ

り分て御覽に入る、鏡先達者ハ女中の氏神見てやりあされと出まうだ
 い、口合^{まじ}交りの前口上、物見だけい歌婢^{こしやきば}レ、^テ評判の彌正平奴、みだい様へ
 のお慰所望^{なぐさめ}くと立かゝればおつと心得たんばの底口をたゞいてう
 かれ歌ふれくふり込^さふり込^くさお先^{はら}を拂^{はら}ふてあれ^{はる}アリヤシリヤリヤ
 いてさ^{ヨイ}行列^{ぎょうわ}揃^{そろ}へてぼつ立ろ、行も^せ通ふも忍ぶも亂れ、風が吹やら、追
 風が、連て^一^{サツサ}ぬふてふの^{サツサ}我里の花と詠ん、授かけゆりかけ、^ハと^ム
 ん^ク、^ミと^ム、^ミと^ム、^ミだれ柳の^ミ、^ミたれ黒^ミゆすの帶^ミ、^ミいやらさら
 さく、^ミと^ムと^ム、^ミと^ムと^ムと^ムと^ムと^ムと^ムと^ムと^ムと^ムと^ムと^ムと^ム
 無^ミと^ム、^ミだれ柳の^ミ、^ミだれ黒^ミゆすの帶^ミ、^ミと^ムやんと^ム、^ミと^ム
 び志めたる^ミ、^ミ切^カき花^ハ九重、櫻^ミあト、彼岸^{ひがん}櫻^ミや糸櫻^ミ、君^ハ揚貴妃^{ひき}
 盐釜^{しおかま}ふげんぞどらの尾桐^{みとう}が谷^や、^テふげんぞどらのを桐^{きり}が谷^や、君^ハ揚貴妃^{ひき}鹽釜^{しおかま}
 びんぞどらのを桐^{きり}が谷^や、吉野初瀬^{はじせ}の花の盛^{さかり}、^テお供のかたげた

御長あきあたへ誰御長あきあたぞあれこそ姫の御長あきあた、草履取
にハ可介可内出來助出來平、ぞうり賣のハ此彌正平彌正平く、花見辨
當丈夫あかそうじや、そこに油斷ハ少しもござらぬ行烈崩すとお先
の女中かづき姿で玄やあくくや、お上臈が見ゆるやひくござれ
品白傾城色の盛ハ起請迄書て底に如在ハ少もござらぬ粹なきよりハ
中居の手管横に帶して玄やあくくや、お上臈が見ゆるやひくござ
されさいのかわらの地藏尊やぐらの上り駒引寄、せんぐらり、ちやん
ぐらりと乗たるハめさましかりける次第ニ閻魔大王三途川を笠か
ぶりかたむけて遙らるゝお宿ハどこじや、山の手ハッはいや徳利か
んあべ地獄世界に着にけるヨイと見物ハ拍子に乗て歸りけり、始達ハ
口々にみだい様御らうじたかヨモ吉白い見物事、ソレ侍衆お足をたんとお
引出にといふに彌正平、マヤくお足ハきあかも取りませぬ、お足より

へお足にめす簡草履御めいくに一足宛、お買あされてやへくとお
履あされて下さるが代物纔八錢宛、そんあら求てやらふかと立寄ばず
や六角堂へ大願有故に我等が手づから履して上るがふ觀音への奉
公マアかふ召せますればお女中方にい達者あ男を持が奇妙譬色事で玄
くぢり有ても第一足の上らぬが佛方便、はくも後生履るくも五障三從
の罪を滅する草履のるとてござりまするといひあらぶれバテモ撰も
耳寄の草履じやあいかゞはかして下されと脛もあらねに履足の白い
衣江が尋常さ次へ鍼平ふいやが跟黒ふ太いへふらん殿水仕のお龜が
足の甲十紋よ余るへ中居のお杉皆夫くに履かへて扱ても玄つくり
心地よい豆の痛が直つたと笑へばみだいも打笑て是へも持と詞の中、
ナカと簡草履恐あがらと召かへさせ跡すさりしてかつつくばふ供の
侍夫トと價あひを渡せば押戴いたさく太勢の附つき故手間入らずに賣切たさら

は是から一休ちつとお寄あされませ。我等が宿へ此圍鍋かこひなべに毛釜もごにもど
此炮烙ばらつ、一ヶ乞つかい猫ねこの子同前じやそんかいあんぼ寐ねとぼけても途と
に迷氣遣まよひあし、藁わらやの雨あめの出でにや知しぬ果報かほへ内で一寐入しゆりさらば閉帳へぢよう、小
家の戸に筵ひじらたれつゝわぶといふ、住家にこそ入にけれ、こあたもいざ
と夕日がけ、男の卒都婆そとば、小町じやとそつと笑わらて乗物釣つりせ、池殿御前いけどのごぜんへ御
歩路打連館かちかちに歸かへらるゝ、天に不時ふじの風雲有人ひとにも不時ふじの煩わずらひを心に工
夫の多熊法眼かくとう、歩ある立たつ爰ゑ立たつ歸かへり乘物先かき、昇居さがさせ家來かわらを近付さへつけば畏かしこま
て小屋の内うちとつくと窺うかがひ成程なまづ、彌正平みまさひらが住家すみやかと相見あうむへ能うなふせつて
おりまする、幸うく、ソレ爰ゑ呼よせと、聲こゑを早く立かたつり、彌正平御用みまさひらごようが
有あれへ出だませい、出だふらふうせいと引ひ出だされ、あら立たつも子細こまへ志おもらず、只
そと引ひずられ、目通のづきに蹲うずくまり、御用ごようが有あ罷出はりだませいとござる故罷出はりだました
が、シテ召めしまする各様方かくようかた、尋たずてわれが何なににする用ようが有あつと出だふらふだ。

夫れへ出ませい、やき出あらぬか、早ふ出ませい。
わめいてうろたへさするあ彌正平そこへ出よさる。呼出すに別義であ
い、無心が有聞てくれふか、見ますればお歴れき様、彌正平めに御用と、
先いか様あ義でござりまする、聞てくれふか、身よ叶ひました義でござ
らば、聞てくれふあ、そこへつつと出よ、バ「這出る」と一聲相圖の詞、二人
一度に捕つかたとかゝる、まつかせ居あがら膝車、續てかゝるを小手返しを
つさりころりと打付たり、四人が互に前手後手、左右にかゝれば身をか
ためはつしくと急所の當身、ころくころんとひいくくすかさ
ず法眼腰刀討てくる身を抜合せ受つ拂はずひつ上段下段、いらつてかゝる
多熊が刀はづみを打て打落し、切先そらして願へ突付く差付られ思
はず跡へたぢくく待ま彌正平手際まへ見た刀を引サア、引サア、じりくすさ
つて眼を付、何意趣有て此狼藉、身に覺あいからぬをあたで毛どりつとも用捨ようしゆ

ハあいぞ、^{まゝ}適々、其手練を見よ、爲いやはやく驚入たる今、の動彌
正平無心と別義であり、身共が家來よ抱へたい何が何と、^{イヤサ}身の多熊法
眼といふて平家の大將忠盛公へ出入者、此ごとく帶刀致せば長袖あが
ら、武士といへんにかぶりのふらじ、子細有て力量有者を望故、只今の狼
籍見所有汝が手練彌正平奉公してくれまいか、^{シカヘ}抱様が面白い、成程奉
公仕ませふ、してこれふあいかにも家來に成ませふ、早速の得心満足
満足切米の追ての事、當分の拵料金子十兩認め置た、汝が手形印形せよ
と投やれバ、押開き讀下し、其日暮の一文奴印形逆へ持合さず、印のかく
と指つんざきしつかと居たる血判見て、出かしたく、^{あつされき}適氣轉此上へ違
變あり、彌主從悦べし、拙者も安堵仕る、と金子の包を懷へお納あされ
と落たる刀、取て渡して一同に、鯉口ちやんと納りける羽織ひして法眼
が、乗物參れと呼られ共、四人残らず生兵法彌正平くつぐ吹出し、

尻引からげた亡者達、六道の辻で草鞋錢直切て居らるゝ最中じや、主人の傍でぞんざいしそく、さらば行義を直してやると、一人くに死活の手際、性根付られむつゝく起て見合す顔と顔、砂打はらふ面目をし彌正平が名對面、今日夕も傍輩づから以後ハ萬事を引廻し成程下拙り入口八兵衛身共ハ六助又内吉平互に別魂くと挨拶取る乗物へ多熊ハしづく乘移れば直よ昇出す四枚がたお草履任せと彌正平が跡み手をふる、腰をふる、主をとり毛のふり仕廻、め見へのはれと蘭草履足を捕へて「歸りける、六波羅ハ都の異鹿鳴草、紅葉かつちる山館思盛卿の北の臺、池殿御前の介抱よ祇園女郎のほ安産げふ髪たれの規式の中、妙達が取るに産後の補藥煎様常にかへりし違例とて看病等閑あかりけり進藏人家貞が女房若倉お見廻と披露の聲、寐所にかくと傳へてや、池殿湯前しとやかに立出給ひ珍らしや若倉近ふくの湯挨拶ハット手をつき

膝摺客、此程ハお次迄お見廻ハヤセ共、女房の涉病架ヘハ、ああたる外余
人ハお除あけあさると聞、涉容財の伺ひも人傳の噂のみ、は前様にへいかぬ
お氣おこもせ、ほ苦勞様やと會釋する、夫ハ奇特やよふこそく、玄うつたが若
若倉尊たつときも賤しきもおあかにや、を腰やせして、姫ひめごぜの身の一大事、
とぞ済産も安かれと清水の觀音様くわんおんへ、祈いのや、ほ寢所にへ燈明とうめいをかゝげ立
願ねんせしに其利生しおうにや、其驛あがつ済産も安ふあされし故、と嬉うれしやと思ひの外
例れいあらぬ済難病あらぬ、人に逢まつを恥給はずきへべお伽おとぎにへ自斗みづから、
傍そばへ寄給よせきへねば折角見廻ひとぐるめに上りやつてもよもや逢まつへあされまい、上り
やつた様子ようしょハ自じが云いませふ、太義おおぎにもこそ有ありととべあき仰あおみ猶ゆすり寄
成程済難病の様子ようしょも承うけひりました、私も數あらねどお家の執權藏人じしやうざうじん
女房、何事もお心置おきなく活用かくようを勤はりるが家老の役、太切おおきある若君様わかごんじやう済誕生さいだんじやうの
折からほりからに前様まへように成なかたり、産家のお伽おとぎ何かの事も承うけひらでり、夫が手前

もいかゞ、ナヤ、左様でござりますまいかあ、サア、いやる所へ尤なれど、今
いふたのを何と聞きやる、常脉の産家あれど、俱も仰を玄て貰へど、とか
く人よ逢事を恥しう思召へ、心を明し合た自、夫で余人へ一人もお傍へ
やらぬハいの、サアそこでござります、お前様の本妻、女房様へお妾、其お
妾にほ男子ができたれば、とふでも本妻様が、惰氣嫉妬の心が有て、ひ上
つと毒薬、毒薬ある、いふ様あ、左様も事でござりますまいけれど、世
間の口にハ戸が立られぬとナセバ、お前を悪様に噂さするも氣のそく、何
とぞ今宵ハ私がかゝつて、何といやる自が惰氣で毒薬をもるとハ、サア
お前様に限つて左様ある事ハあけれ共、世間の噂に色々とあい事迄ナガ
あらひ、殊に忠盛様にハ、法皇様諸共卅三間堂、浮普譜の其間ハ精進潔齋
故、お館へりお入をあい筈、多熊法眼といふお手醫者斗、是を忍で参ると
の事、さすれば人が疑まするも、尤かと存まずハい、サア、其法眼の産前産

後の名人、手負に醫し産婦の療治、自が頼でかけて置た、夫程々疑ひしく
ばは寝所へ同道して、女はの姿を直に見せふ、今いふ通人に逢を恥しが
り、衣をかづいでござるひいの、自も此福顔を隠して問音信、そあたも禮
をかづいておじや、然らば左様と立上れば、池殿傍前先に立、次手
に和子の顔も見せませふ、毎夜の夜泣で迷惑をするひいの、左様よ承
はりました、いかぬ御難義でござりまする、よくお出、必顔を隠す事
忘まいぞと打連て寝所にこそ入給ふ、跡を見送る妙共何とおいや聞
きやつたか、御家老のかかもじへ又格別いかむ奥様も理詰にへせひが
あい、夫いの、いかある事覗かしもあされぬ、寝所難病とへ何そいの、
今いふてこざつた怪しいかげが移るといふり、女御様のお頭が鹿の首
に移つて、またの有角が兩方へ、かぶしやつきりと立といのまだ其上に
産子の和子達し、いよい子じやが夜又成とおぎやア、と泣續、あの様に

夜があ夜びて泣きやるのハ犬にあらしやる下地しやといへばふいや
があせに、^{ハラ}母涉様ハラシマサニハあの通生あがら鹿に成てござるじやあいかハシマニそ
ふじやと口々笑ふ後ハシマニへ立出る、若倉が思案顔、池殿シマツハ前も續て出、何と
若倉是迄傍ハラシマニへやらぬ譯ハタケとつくりと見やつたのいやキウお道理でござり
ます。したが今宵ヒヨウのお伽コトハハ此若倉が致しませう。すりやまだ疑ハセが晴ぬ
かや、左様ハラシマニでござりませぬと、云つゝ立てお次に向ひ、若倉が供の者
其箱持と呼聲ハシマニ、あいと出くる姫ハルミが、一つの箱を直し置ハラシマニ用モウいわい歸れ
歸れと追歸ハラシマニし、ふた押明て取出すハ乞ハガシマニはし持衣ハラシマニ是ハラシマニは、忠盛様シマツ守護の間
召れたる裝束ハラシマニ夫藏人ハラシマニを以て仰越ハラシマニれし其子細ハラシマニ、すべて產家に先例有、男
子あらバ桑ハラシマニの弓ハラシマニ、蓬ハラシマニの矢ハラシマニを矧障碍ハラシマニ拂ふ事故實ハラシマニ、忠盛様シマツよも藏人ハラシマニ
法皇様ハラシマニの守護ハラシマニ又參れば、汝かへつて其役ハラシマニを勧ハラシマニよとのは仰、女あがらも忠
盛様ハラシマニの名代ハラシマニ、今宵ヒヨウの直宿ハラシマニハ此裝束ハラシマニナウ、是でもお伽コトハハ成まいかと辨舌ハラシマニ

さつぱりナセシハ、實藏人が女房へ、池殿も黙き給ひ、夫の仰と有からぬ
何しヌ違背の有ベキぞ、寢所の次の廊下口より座敷が直宿の處、然らば左
様と、狩衣をほし、小太刀も腰より指足のふ次をさして、入折節、多熊法眼様
移出へと取つがせ、醫術に眼光らす頭殘切髮頤先へのつかく進る席
に大あぐら、池殿は前懸懃懃に、ヨレ御苦勞様、レたべこ盃、お茶上いと饗有バ
多熊法眼、シテ、女御の涉様肺別條のほざあいかと胸の挨拶、呑込涉臺、
祕共園の爐に炭ついでおけ、衣江の櫛櫻の役で、あいかおらんのお乳
に氣を付よと人を除るハ密談と皆々立て入にけり、法眼邊見廻して、新
參の若黨やい、藥箱是へく、チイ内玄關の切戸の庭へ、入くる奴の彌正
平が、せうぶ皮のぶつき羽織仕させの大小やげん鍔、銀金具の藥箱様
先にかつつくべふ、夫とみだいも不審顔、あの者ハギのふ體にア、成程く
六角堂にあた一文奴、中々力量の者あれバ召抱て斯の通ヤもふ用ハ

あい、玄關に扣へておれさ、ナイ、切戸の口に、さとすら開あひなが密に談する子細有バ
御前にも人を除召れた用有バ、こちから呼罷立、く、ナイ、切戸の外へ立
出しが立留りテ、御臺様たて、きのふ慥に草履を賣て覺た顔、よく何にもせ
よ女中斗の此館、身が旦那も療治りようぢ、とか付女性と二人指向ひ、く、ぞふ
でも、色事よ極つたと、つぶやきく、出て行、池殿傍前小聲に成、きのふ
途中で、やた通、女めのの姿の異形ゐぎやう、の脉、血の上の悔りで氣を取うな失ふか、目で
も廻まわかと思ひの外、けふで六日に成けれを何の驗げんも見へぬ故、心をせく
れ外でも、あい、卅三間堂棟上も早今日、忠盛が歸られて此事を乞らせて
ハ折角仕込だ心づくしも水の泡はけふの日中に殺す思案、頼で置た毒藥
ハシイ、成程、く調合して參つた、則是にと取出す包、此秘藥の奇妙といふ
ハ男々呑せバ、目鼻口から血を吐ば、女めのに幸究竟さくきゅうきよ、彼月の不淨じよのおりるご
とく人知らずに命を取、幸爰めぐら、藥の風呂、水の加減も法眼が手づから仕か

げる火をぬこす、扇の風も六天の魔風を爰に吹立る、毒薬とこそ、亥られたり法眼が志すまし顔、太切あ秘藥の料、金子百兩引かへの約束ふ渡し有といふ内に、池殿へ手箱より包取出し、傍に置^キ、あふ法眼疑、疑ふでへある共、假初^{かり}あがら女房の命生る死るの大事の場、慥^{たしか}あ證據^{しおう}か有かいのエイ何と、サア忽命^{たぢまち}を取といふ、慥^{たしか}あ事が見たいへいの、ハテ疑のふかいお方、女房の姿をあのとく、鹿のかげに移したを我秘方、眼前慥^{たしか}あ證據^{しおう}でありますか、煎^{せんじ}かけた此薬早ふ呑して、サア其試^{こうるひ}が見たいといふ事、然らば姫共か夫よ^く、夫で^ハ結句傍輩^{きょうばい}同士、女房^{めらわ}又洩^{あはれ}て^ハ猶大事^{ごと}をふが、あと法眼が^ハ、夫よ^く、新參の若黨^{わとう}め、そふじや、^くと打點^{うち}き、彌正平參れ^ナく^く渉用いか^レと躊躇^{ちう}呼^ハ出^スの別義^{べいぎ}で、無心^{むじん}が有聞^{うもん}てくれふか、テ^あ改^かつた語^ご、無心^{むじん}といいか^レな義^ぎでござります、イヤ外でもあい、爰にコレ煎^{せん}た薬が有、汝是を呑でくれ^ミ、私め^ハどこを悪ふ^ハござりませぬ、ヤサ、主従^{しゆ}と成^カ

らの主人か用に立ん爲さ、左様でござれ共とつくと様子を聞あい内
へめつたに藥レ、シ尤シテ包ハシマし黃金投出し、夫で呑スと取上ヨリヤ金そふにござ
り、是で呑との子細ハシマせふでござります。チサク此藥レ家の秘方ハシマ汝
がどき力量有者に呑すれば忽ハチニに力も落ハラシム燈心ハシマを持力も無い又力量ある
き者が呑スば、大力ハシマ成スルよつて、是成池殿ハシマ前ハシマ、魔術ハシマを好給ハシマへ共、高が女性
のかよハシマき體ハシマ力量の増ハシマ標ハシマと勧ハシマる藥試ハシマあくてい呑スまじと有によつて
指誥汝ハシマへ身が無心ハシマ、則褒美ハシマの金子百兩ハシマ、汝が力をああたへ譲ハシマる忠義の藥
々々早ハシマくくと法眼ハシマが僞ハシマりかざる詞ハシマの端彌正平ハシマも當惑ハシマし、何ハシマば左様ハシマ
意ハシマあされても能思ふても傍らうじませハシマ、生れるがらの中風ハシマへしらず、男
と生れて力があくてハシマ、サクそこじやて、力があくても其金を、身に付な
バ一生ハシマ安樂ハシマ此法眼藥を盛、人を助ハシマるが醫者ハシマの役、汝が爲ハシマえ悪い事を勧ハシマ
ふかせひに呑早く呑スまだおつ志ハシマやる、神佛に手を合ハシマせ、息災延命家内ハシマ

安全と祈るゝ何の爲でござります、我人體を達者として、子孫の榮を願ふ身が、何ば金がほしい迎、生れも付ぬ頑と成骨あしに成事り、渙免くと逃出る、法眼先に飛でおり切戸口にヤアぞこへく、逃る逃遯そふか畏つたと呑べよし、呑ぬと素頭押へて呑す、サク夫でもと立戻る、こあたりみだいダ長刀構、呑ずバ是にのせふかと左右を立て切鋏鑽跡へも先へも彌正平が地獄落しよ合たる如く遁る、方をあかりしが思案極てそふじやく、成程藥呑ませふ、其藥の力の落る斗亥や有まい命も落るでござりませふ、何とく、切の様子を立聞たあ、いやく、何にも聞へ致さね共斯手詰に成から得心でたべませう、出かした、迎も免さぬ管が命有やうハ毒藥じやりやい、ナ鞠り仕やるハ理りヨレよふ聞てたも、殺さにやあらぬ人が有故、調へた此毒藥試にせふぞ呑でたら、ヨレ自分が頬だぞや、若も親兄弟妻や子でも有ぶらば、死にやつた跡で自分が愈比に屈てや

らふ彌正平、そあたの命百兩に買かたぞや、サア早ふ呑のでたもいのテこれゆ、太
切きる人の命、澤山たくさんそふよざと鰯いわしひか何ぞの様に、藥を呑のと忽死たちまつます、死だ骸からに
に千万兩の金貰うけふて、何の役に立たつまする、届てやらうとおつさやつても
親おやしへあし、女房めいぼうがあければ子こへ元より、併あわせ兄弟いりどがたつた一人、夫めも幼少ようせうで
別わかれれたれべ、顔おほも忘わらす有所しゆゆうも知しず、心が、り、夫斗め、此様に二本さし
に成なたも漸よときのふからすかんびん、一文奴め、面おもてを晒さらすも命いのちが惜うれさで
ござります、哀あはれ不便びんと思召毒藥のくわくを呑事の、涉わた赦ゆるされて下おされませ、見みます
ねば此様けいが、結構かうりょくあ涉殿造てんつくのお長者様おながくじやう、手てを合あわせ、旦那様だんなじやう、法眼様ほうげんじやうと
手てを摺すりて拜あがんで廻まわる男泣目おななじめからこぼる、あら涙、白洲しらす、蜂はちの巣すをあせ
り法眼ほうげんがむつと顔おほ猶豫ゆうよする程付つづ上ある胴張者どうばうしゃめ、涉前わたまへに、其長刀そのながと、生殺じきごろ
よしてくらへす、工面くわん、隙取ひまとりて、妨さまたげぞと、かい込こみこ長刀刃ながとじんに向むかにあし、ひらり
とあぐればきりとからし、こりやせふでも呑のす所存しゆそんでござりまする。

おんでもあい事叶ひぬく、大事を乞らせて助ふかと打ふる長刀かい
撃^{つか}ハ^ハ美しい器量をして人を殺す毒薬といふでも是ハ喀氣^{りんき}の沙汰^{さた}
聞た者ハおれ斗人^{ゆうじん}が知たら免^{ゆる}そふかと、いはれては臺もたまり兼^{モウ}遁^の
さぬと引たくり切込長刀たぐつて取石突丁^{づき}を急所の當身涉臺^{とうだい}の跡へ
たぢくくく、ニ狼籍^{ろうせき}と法眼^{ぼくげん}がざるりと抜て切かくる、まつかせ沈^{しづ}です
またさせ同じく石突真の當^当とのつけに反^{そむ}返^{そむ}る手練^{てのねん}の程ぞ心地よき
され共^{さば}騷^{さわ}ぬ彌正平が茶碗^{ちゃわん}に薬をうつし入、庭^{にわ}のつたる法眼が體^{からだ}へく
つと活^わを入^い、親方氣^{おやぢ}が付たか息^{いき}つきに茶を一つと渡せば取て押戴^{いたさう}
とあたか是^ハ過分^{こぶん}と呑^の込^こ毒藥^{どくやく}息^{いき}する内、こあたに轉ぶは臺の傍脉^{そばみや}
取て見つ足の脈^つくと考打^{かんがへ}黙^{うなづ}き抱起^{かゝげ}して死活^{しきつ}のさそく、むつくり起
たる池殿^{いけどの}落^{おち}たる長刀取直し、正彌平やらぬと討てくる及先をくい
つてしつかと取みだい所せくまいく、望の毒薬試^{こうやく}見せふんそりや誰

を、誰といふたらこそここにとひやうまづいたる詞の下法眼が白黒眼
よつく身共を當たよあ、毒薬を立寄目先鍋をつけ付さし付て、此中
にい秉もあい、あいといへいかにと鞠る顔、打あがめて高笑ひ、息次
え茶といふて、呑したを忘たか、主に毒を呑したといへ、憎い奴と睨で
見てもびく共せずかふ成からぬこつちから縁切て、主で、あい家來であ
い證據の爰に、昨日死た身が證文、當身の間、よちやくふくしたはしくば
めいのを土産にせいと、すんくに引きさきく打付られ、重々憎と立上
る、足元ひよろく、脛腰迄、忽廻る毒薬の駆け目口に血を吐て、七顛八倒
のた打有様、己が手盛の鳩毒、報ひの程ぞ、醜し池殿は前も醜しあがら
心に點く安堵の思ひ、彌正平すつと立寄つてと、いめをぐつと足の先、落
たる包を拾ひ、上みだいの傍に直し置く、驚入たる毒の試、最早ちつとも氣
遣もし、残つた薬を煎かけ、嫉妬のはむらり只一ぶく、女臣の命、ふさぎ様子

へ、残らず聞たお前の味方合點かゞ嬉しいく、そんあらやつぱり此金
毒薬の價の金彌正平そあたへほうびにやるゝゝ法眼が大欲頗人に洩
すまじと思召ふが、此上に十倍金の山をつみ、法眼を誣義せば其金に
目がくれ白狀するへ知た事、そこへ心の付ぬが女性最前見届たる前
の性根に見所有、今も彌味方して本望の後だて、命を的にかける仕業金
貰ふて何にせふ、慮外あがら男でゑす、金で頼れる様あ魂でごんせぬ、ほ
うびもいらぬ、金もいや、そつちへ取て置ゑやませと、口も心をさつぱり
と、實一死の男へ、臺も力を得給ふ風情、頼もし、彌頼み頼まる、證
據が見たいと詞詰^問、尤互に心を合すといふ、印の金打まつかふと、刀す
らりと抜持て長刀の刃にてうくく、忝い落付ました、かふ成上^問
何をか包^つ、まん、あの祇園女侍の身の上、勅錠^{ちくとう}といひあがら妬^ねじい其上
に、男子迄出來たれば彌しんぬがもへ返る、心をせくり夫の留主一刻を

早ふ取殺す恩案しあんいかふと叫さけき黙まつく庭の草露くさめを洩あらわさぬ密事ひそと密事ひそ若毒藥わざやくで仕損しづんせバ彌正平が段平針膽さな先へ一思ひ成程く、女侍めしが寐所みすの廊下ろうかへ、其切戸きりど左の方、出合所しゆはくしょへ築山つきやまの梶の庭と夕暮方ゆふくわ、土圭どけいの六つもせりしあく必待ひてぞや合點あてと別て、こそへ梶葉かじばの風よちりくる色見れべ物思ふ人の胸の火か、こがれ出るぞ、恐ろしやしんぬのはむらいや増ましに消きもやらぬか、池殿御前いけどのごぜん、しうねき心穗こころに出る、麥藁笠むぎわらを眉深まゆふかく手に持油指ゆきそへて、いとゝ思ひを焦あわせとや、おぞす姿すがた我獨ひとり外にほかに人も白小袖心の釘くぎとき立て、女御親子めいごしんしを目前まくまつと取殺とりおとさいで置おきへきかと、夕闇ゆふてら照す燈籠とうろうの火かげよ移す我形女共見めいじょくわんへ又男共見だんくわんへつ隠れつ御寐所じんびよの廊下ろうかの庭に折たたもよく誰だれも木立つむぎの築山つきやま傳つたひ、忍しのび入いこそあやしけれ直宿ただしゆく守身まもの油断ゆだんあく。始終しゆうじゆを窺くわふ若倉わかくらが、ゑぼし狩衣えぼし引ひまとひ心こころも細太刀脛さき高く、ゑたひ寄共よし白洲しらすの庭にわ曲まげ者ものやらぬと引留ひとどめたり、こあたも念力強氣ねんりきょうきの姿、寝所ねしょをさ

して行んとする。猶組留る後抱放せ、放さじ萬かつら風にもまる、ふせ
いあり漸にふり放し廬下をめがけ駆出せば、そつこいと引戻し、笠かあ
ぐりて顔と顔、みだい様か、若倉か、お前へく大それた此お姿、今宵
の私が直宿と知つ、耻もせず、慄氣嫉妬の心から、女房様のあの様な怪
しいかけも合點がいた、剥親子御共お命を断んと、夫程に迄憎いかへ
夜晝ともした燈明へ、油をつぐのに、仰山、此出立、おせしの正躰見付
たから、此水瓶の油さし、こつちへおこしと取んとする、渡さじと、懇
す袂ハ蝶の羽か取んとするが、狩衣の袖、牡丹の花競、互にせり合其内
よ、ぱつたり落たる水瓶の袖、残らず、む三齋、赦さぬと隠せし及若
倉やらぬと切付たり心得受たも、鞘あがら打ハ拂ひ、あぐれに受る、うハ
あり打、あしらい兼たる刀の鞘、打ハ鉄杖、劍のじもと、二ツの鐸音ちりり
んく、慄氣かふじて茜さす、顔の照葉や紅白粉、亂る、かもじ髪の香の

梅花又あらぬ紅葉の庭、二疋連たる獅子ふんじん花踏ちらすごとくに
て疼^{ひるま}す去^{さら}す打あふ及音行もどめるも姫^{ひめ}ごぜぞし支^さるこあたひ弱弓の
おくれて跡へたちくくく^{コトハ}みだい様此裝束^{しきぞく}の忠盛様のゑぼし狩^か
衣夫に歎たふ心じやあ^チ夫忠盛殿女侍に我を見かへしつらさ女侍が
あくべと思ふよりしんぬの燃る度々に胸がさける腹が立^{なる}そ^{のけ}退若倉
退まいか^カかやふる事もあらんかと忠盛様の仰を受^{うけ}直宿^{アシタス}ア此若倉
みぢんも爰は動かぬく^ク、^ク動かずばまつかふと又切付るを受留^{うけ}る鞆^ヒ
碎^{くだ}て飛ちつたり^{アハ}、お主に手向ひせぬ印今迄鞆であしらふた私
心を推量^{すりう}し本心に成てたべ願上ますみだい様^{ヤハハ}異見達聞ぬく
と夕暮くらき嫉妬^{うらぎ}の念、こあたひどいめる忠義の道果しあければ聲を
上彌正平^{ミツマサヒラ}いづくに有出合くの聲の下、まつかせ是にと走出^な支^さる若
倉かい摑^{つか}二三間投退^{なげ}たり^{アハ}邪广^{アガミ}ハ拂ふたといふと早く刀追取みだ

いの脇腹ぐつと一突わつと斗ふ玉ぎりあがら取ちがへたか狼狽たか
自さを何故にと苦しみ、紺ふを耳にもかけず、怠ぐれば傍わきに若倉が思ひが
けあき此有様彌正平との何者で、みだいを手辻にあしけるぞといぶか
るも又道理ある道、若倉殿のは不審尤、我身の上を一い次第語つて聞ん
よく聞と、手負おひを突つきやりそつかと座し、こりや池殿、味方顔した此彌正平、現在
そちが兄じやいい、惄りい理ほり、元來某の南都春日かすがの社人三笠兵衛
宗久が駕親くわいにてし、宗久妹が生長器量うまねだらぎも勝れて見へあがら、一いつの疵きず
右の足裏あしらにあり、鱗うろこの瘻うきず元來父ちの神職じんしょくあれば、未前まぜんを察する妹が生
長おさな、父母一所に育てそだて、國親に崇たむるといふ、詞の内に先立母おやぢ、折たたこそと驚て
捨すねばあらぬ品ものを成なざへ、親の不便びんさ余り逆さかも生立物あらべ、立身
出世しゆの相あわせも、都の内に捨んすど、此王城に來られしはが頃ごろの大内節會おもてゑの
夜よ御溝水みよの其邊ほとりに捨歸りしとの物語、此兄おも其頃ごろ辨べんあければ不便共

悲しい共思はざりしが、成人するゝ隨て、弓馬の道を心がけ、武者修行に家を出、當夏南都へ歸りしに、何者の所爲にや父の兵衛を指殺し、家々預り大事にせし、千年劫ふる白鹿奪取れしと家來が、噂、顔もしらす名も知らず、
譯も立ざれば、三笠の家へ没収、又合、夫々所を立退て、何卒歟も見出さん。
又幼少で別れた妹、存命で居るあらば、築地の邊へ捨てとの、父が詞を思ひ出し、一文奴の鎧ふりして、内裏上臈と見る度に女草履の突付賣願望の譯有迎、拙者が手づからはかせし、幾千人といふ中に、昨日六角堂の我門前、乘物へ草履を突付、足の裏を見た時、そこ尋る妹じやうと、思へど夫と名乗もありず、鑑よ、折もあらんと思ふ中、あの法眼に抱られし研究竟、一此館へきて顔見た時、父のさいごも語らんと、折を窺ふ無道の法眼、嫉妬の相槌毒藥迄工の脣をこつちから、味方したハヨリ妹迎も變ぜぬ嫉妬の恨、見遁しあらぬ今夜の時宜、せひに及ばず此有様、親にへ捨ら

れけふの今廻り逢たる兄妹名乗ぬ先に殺すといふ是もやつぱり因縁
かと語内内も目にたもつ涙ぞ、眞身の印ある、傍そばに様子を若倉が扱あつかい誠
の妹御か、レヤみだい様、お心こころいかゞと、始の恨今更に涙もろきうらぎ女
同士、池殿いけどの苦しさも血筋の兄の物語思ひ合する事有ありと、若倉が介抱に
漸くわくと起直り、扱あつかい誠の兄上かや、自みづからが假かりの父、大炊三位有あり教卿、今はの時の
遺言ゆいごんに、内裏だいりに節會せつえいの有し夜、御溝みぞの池の邊にて、拾ひひたるそちあれば所
を直に池殿と付たりとの物語、誠の父おへ奈良の里三笠兵衛様で有たか
ゞ、悲しや、兄様誠親の歟といふ、此妹でござんすはいふ、ヤツク父兵
衛殿ひょうでんの何故に、其方が手にかけじぞ、子細こざいいかなとせいたる顔色がんしよく、驚おどハ尤
でござんする様子語ごも恥はずしあがら、自みづからといふ妻有上忠盛殿ちゆうせいの武勇ぶゆうをか
んじ、白河法皇しらかわほうりょう、祇園女御ぎおんめいごを給あたへりて、一つ枕ねの闇くらの内始うちの程�の中なか
に、惜氣きなき妬ねこもあかりしに、二月立三月立、早五月のいへた帶じう、自みづからが生得つねよ常つね

常から物妬むらみ、生つきとの氣も付て、必女の嗜事しじご思ふまいと思ふ程いや増
まさる胸のほむら、焚付いたたきる多熊法眼、女御を殺すによい術、三笠兵衛が預
る鹿、千年過た男鹿あれべ其油を玄ぼり取、空青石の水を以て、彼が秘方
と諒合してかゝげし燈明、清水の觀世音を祈ると偽り、夜晝產家うぶと灯せ
し乍、女御のかげに忽たちまち鹿の頭に移りしづや、まだ其上うへ産子迄夜泣の
覺おひも其業わざかと悦ぶ此身このみの欲界の魔王まおう等ひしき今此形源義親が祇園の社
へ忍ひし姿、遠目に鬼と見へたるよし、忠盛殿の噂うわに聞覺たる此出立、實
物うしの時もふで人を呪のろへ、身みと報くらしふ此苦くさも覺悟の前、兄上歎かくさして下
されど、有し次第をつとくよ聞き彌正平ヨリヤ妹めい其鹿こそ親人が預り
給たまふを能知のぞて、父を討うた法眼ぼうがんよ思おもはずしらず毒藥どくやくで、歟あを取とた父
兵衛ひょうえが手引てなされた物ものぞかあ、添そない有あがたい去よあがら葉はの上うへから捨すら
れても、やつぱり産うぶの親人に祟たごをあし法眼ぼうがんと討うせたる元げん現ざい我妹がめい現

在兄が手にかけて、妹を討も因縁づく、毒蛇の鱗の痣有り、嫉妬の災有ベ
しと、見付る親も妹も因果の因縁成けりと、不便さ、増る目々涙、若倉も打
玄はれ、いかに嫉妬あれバ、迎親御といひ其身迄、ひよんあさいとの此有
標、さんげに罪を滅すれバ、未來の成佛し給へと、いへ共みだいひやく
いや、此身此儘死からひ、生かへり死かはり、女御親子を取殺し、安穩でお
こふかと、怨念凝たる其顔せ艳を散す如くあり、彌正平猶も歯がみをあ
し、因果の道理を聞しても、いまだ發起の心へあいかゞやく妹、祇園女御の
胎内より、出生の縁子へ、白河法皇の御胤へと世の風聞、かほどの事を辨へ
ぬも、輪廻よ心のくらむ故、先立た親々迄地獄へ導不孝者、見さげ果た
る其根性最早此世の暇をくれんと、突込刀に手をかけて、互々見合す顔
と顔、思へべ不便と手もあまり、一筋あ心から憎氣も出る嫉妬も起る、鱗
の痣の惡龍が此世へ生れて妹を成人を殺すの呪咀のと目の前兎を兄

弟も持たる兄も過去生の報ひか罰が淺ましやと人目も恥ぬ恩愛の血
筋の涙ぞ道理ある漸涙の目を拂ひハツとふじや誤つたり、逆も斯ても助
ぬ命觀念せよとふり上る其手みすがる若倉が待てくと留るにぞ、イイ
赦されよと争ひ果しあき所へ暫ぞふと聲をかけ備前守平忠盛法皇を
供奉し参らせ悠々然と入給ひいかに旁承へれ卅三間堂御棟上の規式
より頭痛の御腦も全快にまします間恩悅ゞ存奉れ忝くも法皇此館に
遷幸ある事女御の違例產子が夜泣み、歎慮を苦しめ給ふ余り我逆もい
ぶかしく若倉を直宿にいひ付密に歸つて見届たり彌正平が忠節みだ
いが愚痴誠や内心夜刃に譬たる佛の誠目前く迷ひを晴せよ池殿と忠
盛の詞の内しづくと法皇の寢所の方に入御成玉ひうつる障子の打
とけぬ女御の衣を身み覆ひ恥しぶりのほ風情いかにや女御と召れつ
つ邊輝く燈明に立寄給ふ法皇のかげもありさをしかの女御を始

お傍の女中、こゝくふしきと立寄忠盛、移る男鹿のかげぼうし稀代成
ける妙術やと、有合人ぐ一同に鞠て詞あかりしが、忠盛騒がず扇を開
き、打消光り一時に像へ消て誰もも今ぞふじんの瞳にけり、折しもむつ
かる産子の夜泣、秘達が取るにいぶりすかせをいやすむおびへ法皇涉
衣に抱上、夜泣すと、たゞもり立よ綠子へ、清く盛ふる事もこそ有と、一首
の匂製のきそくにや、夜泣へ忽離よりけり、忠盛ハツト恐れ入、水子を抱立上
り、全く君の聖徳、夜泣も納る歌の徳、立入給ふ下の句の清く盛の文字
を、取名を清盛と改て忠盛が家督とあし、忠孝怠る事あかれど育上たる
平家の芽出し太政大臣正一位平朝臣清盛、辻官職上あき繁昌へ此稚子
の生立あり、法皇はかん淺からず、祇園女傍が不例といふも池殿傍前が
一筋の道を守るより嫉妬の念も理りく、譬死共彼が名を女傍に譲り、祇
園女傍を今より、池殿山前と呼あらば兩人共に添心恨を晴よ池殿とい

とも賢き勅り、皆よハツト平伏の中に忠盛頭を下。世に有がたき院宣に何か
遺恨の残るべき、兄弟が亡父ハ三笠兵衛宗久とや、彌正平池もつあがる
縁、彌平家に仕ふといふ、心を以て今日も、彌平兵衛宗清と改名し、清盛が
めのと、成池殿と名を残す、女房が傳心得たるか、重も厚き涉惠ニレく妹
聞たるかと、とへばよつこと打笑て、物いひたげみ手を合せ、夕邊の露と消
果たり、法皇重ていかよ宗清唐土に、楚の元王、雲夢の地に獵し給ひ、鹿
の塚を築せて白鹿廟と号し例妹が亡骸ハ鹿の油と諸共に清水寺の邊
りよ葬り、鹿間塚と名によばべ、彌成佛得脱せんと、勅錠有べ、悦ぶ宗清、君
も還涉の傍催し、供奉の忠盛警蹕の傍先を拂ふ武將の役彌平兵衛宗清
ハ妹が亡骸清水寺へ、送り營む鹿間塚、庭のてり葉もちりぐにちるや
紅葉の八重九重錦をかざる産衣の、祇園女ひの名もかへて爰池殿の、六
波羅に育つ水子の夜泣迄納る歌の、威徳家督の若子を若倉が抱かく

へてねんくころゝいとし殿よ花やる花の都の輦にたりもり立よ表
の代に清く盛る因縁謂ひニ此、／＼此若君を仰がぬ人こそあ
かりけり

第五

秦の徐福が口すさみ奇異の深山といひ初て紀伊と号し國の中牟樓の
郡の山社三所權現と崇奉り歩を運ぶ靈地へ白河法皇は參籠の供に
ハ横曾根平太郎當吉一子綠丸諸共に證誠殿の階の本通夜を下の年籠
り信心深ざ夜もすがら眠催す肱枕夢の告をや松の戸の帳開くと覺
しくて神童顯へれ出給ひいとも妙ある浮聲を上いかにや法皇ゑろし
召浮身頭風の懶により三所に歩を運べれしき特によつて告ゑらしゆ
たる一字の堂觀世音の靈地に准へ卅三間堂落慶に及びしより病平龜
の悦び善哉く平太郎にハ權現直に浮ゑめしあらんとの給ふ聲ハ神

勅の金剛童子の其姿^{ひざま}の内に入よと見へし眠の夢、法皇御目を開き給ひ、正しく病をいつしかに御心涼しく見へ給へば、平太郎もふしげの思ひ信心肝にめいじつゝ、猶神詫を待所に、異香妙ある御帳の内、權現の御姿いかにけ高き僧形忽然と階三段おり立給ひいかに平太郎承へれ汝孝心淺からず、年頃爰に歩を運び、神を敬ふ正直心、飼する者より食をあたへ、田邊の濱の路頭にて、水より溺死たる者其尸を葬り隠し穢ふ浮を忌嫌^{いふきら}ひす、慈悲万行の施は則菩薩の行と云口に稱名怠らず不斷念佛する事を、誠の心有故^{ゆゑ}其恩德を報せんと、忝くも御頭を低、三度禮拜あり給へば、平太郎親子の身を打伏忝け涙と感涙にすさつて九拜^{くわい}あしにけり、御佛重て宣く我は是本宮の神跡伊弉册命の垂跡、本地あみだ如來^に、濁世の凡夫を救へん爲、一字の堂の棟をせし柳の楊柳觀世音假に化現の像とあし、汝が妻女と身を變じ、もふけたる綠丸彼が成長の時を待^{まつ}候

時人皇の八十代承安三年の頃みいたらば、月の輪の禪定兼實、六角堂齋世菩薩に告子の祈誓を待、我其時親羅丸と生出、念佛の行者と成、一向惠終の眞宗を普く此土に弘ん時、一子綠丸に名を譲り、平太郎と改名せよ。親羅丸が弟子とあし法号へ眞佛房と名を呼で、國より行脚に召連て念佛門を弘ふべ、濁惡愚痴の尼入道凡俗男女を導て、一向專修に入ん事他力本願佛の威力、歸命無量、亦む不可思議稱名をだに悅べ、忽九品蓮臺に其身其儘座せん事、何疑ひの有べきぞ、誠や十劫正覺の如來の誓願あるたる、是ぞ佛の六神通未來の本宮阿彌陀の本地、一子が出世を待べしとの給ふ御聲と諸共に僧形忽金色身後光へ四十八願の光りを放ち目前より彌陀の印相の真向の尊容ありく、拜まれ給ふい有がたかりける像あり、法皇始平太郎親子佛意に叶ふ有がた涙、扱こそ時代押移り月の輪兼實公、六角堂より告子して誕生をします阿彌陀の化身、一向門徒の御

開山親羅上人あがめと崇奉り、末世の衆生を救すへせ給ふ。悲願の程すぞ有がたし。
猶も信心いやましに法皇合掌偈仰有ば平太郎親子の同音よ。あむあみ
だ佛く、六字十字の名号がうと現世未來過去遠々助給ほらおんかうさじへる報恩講朝時日
中なかか初夜の勸行さんぎやう、末世に榮さかんへる本願寺、あみだの血脉けつみゃく怠轉だいてんあく、後五百年
の末法有緣さうゆう草木國土皆成佛音樂響花おんがくひょきふりて、和光の神脉じみゃくありくと、夢
か現か白幣神しらべいじんハ土らせ給ふと見へし眠ねの、夢さゆの覺おもにけり、頭風山平愈寺
運花王院卅三間堂事故じごうじごうあく成就じょうじゅし、法事の舞樂ぶがくも納なりて法皇しらう縷じとねに御安
座有あ、院參いんさんの公卿達列こうけいだれを正して詞公有、法皇夢の心地じもさめ、平太郎ひらたろう
いづくに有参あれくと勅わざりばつと答こたへて横曾根親子よこそねしんし衣紋繕いもんつくひ立出だて御
階はしの本もとに畏おそる、法皇御聲ごせいさへやかに、只今眞睡まじねむ。正夢の所所ハ熊野證誠殿じゆうのう
汝親子わしきんしを召連めして節分の夜の年籠とどり通夜ゆきを了すと見し中に羨うらやましきハ汝等わしねら親
子權現直の禮拜らいぱいハ佛意に叶ふ冥加めいがの我達取分とりわけて其子隨分大事に守立

よ、成人の後普く一向宗門を弘めんとの神勅朕も病苦を遁し悦び彌信
心怠るあと、勅錠有バ平太郎、ふしき成涉夢かあ、某も暫が程まざるむ
中の夢の告割符を合せし勅り、此駒が成長迄未然を察する御示現、是も
偏に權現の守らせ給ふ有がたさよ、^國綠よ、隨分早ふいつかふあれ、平
太郎といふ名を讓るぞよと云聞すれバ打點うぶつき、^コと、様わしを夢を見
たひいあふ、大きう成たら親羅聖人様とやら、此おれを弟子にして、日本
國へ門徒を弘め念佛を勧れ、悪人へ皆佛に成げ、南無阿弥陀佛
といたいけに手を合するもふしきのふしき法皇始一座の諸卿、誠に稀
代の稚子やと、皆感涙を催せりかゝる折から備前守平忠盛、進藏人引連
て庭上に頭を下、是成平太郎當吉、先年親みて候次官光當、北面の武士時
澄が手にかけ討たる父が敵、何卒ほ発を蒙り、時澄を討て父が遺恨を晴
さん事、藏人を以て某への願ひ、元來時澄射藝の家にいへば幸かある此

堂の様よおいて矢數を射させ、平太郎にも名乗合せ、本意を遂させや度
傍願ひにひと、奏問有べ點かせ給ひ、誠や時澄ハ謀叛人季仲に心を合し
事聞及ふ、平太郎ハ先祖々忠功厚き其上に、佛智ニ叶ひし者あればとも
角も心に任せよ、藏人よきに斗らふべしと仰の内、時澄ハ某が手の者を
遁へせば、追付是へ来るべし平太郎殿此ハ傍用意ぞ勧る嬉しさ親子共
法皇よ暇を乞、藏人が案内に悦びいざみ入跡へ、貝鉢太鼓亂調に響と
しく冠者爲義甲賀山の凱陣迎、勝色見する鎧の袖季仲を高手に、誠引立
出、君の威光を頭よ戴一戦よ切靡に見参に入奉ると言上あれバ、季仲無
念の眼さし、奇怪至極と睨た斗、忠盛勇でお手柄く、繩付ハ此儘に檢非
違使の手に渡し、爲義の勳功ハ内裏の聽のほさたにあらん、先々休息然
るへしと、君も還御の御供を忠盛か引添てしづく、還御成給ふ、既に用
意も辰の刻北面の武者所矢數の願相叶ひ、矢抱又弓を脇狭的は五寸の

角を立、射前に直つて始れ、通り矢仇矢あわせのやの藏人が、床几にかゝりざい退取當りくと知せの疊矢數も既に「納りける時分を窺ひ平太郎弓矢携つゝ」と出で、時澄、五年以前熊野において見遁し置たる親の歟、横曾根次官が一子同苗當吉尋常よ勝負くと聲かくれば、瘦浪人すうろうじんが鏽矢さびのやを以て、歎討とハ腹の皮、一筋残つた乙矢おののやを取て、胴腹を射ぬいてくれんと弓ゆ矢やはげて、つゝ立たり、こあたを元々弓矢の家、一矢やよたよ中ぬぬかんと、同じく矢やはげて立向ふ御堂の扉内を開きぬつと出たる綠丸刀持手てもかい、數組ねうぐみ固し時澄が弦づるをはつしと切拂きりほへば、何奴なんやと狼狽眼ろうばいたま弓取直す其隙そのまゝ、飛くる矢坪やつひらの時澄が、胸板朱あかに射通され、をふと轉ぶを起も立す、親子一度に立かゝり、父の歎ちい様の歎覺あわせたかと、とやめをさしもに平太郎親子、天にも上る心地あり、引返して忠盛卿藏人諸共出來たく、此由院へ奏問せば、彌涉みよせかんましまさん、いざ同道と打連て院參いんさん。

三十三間堂

百四十六

急ぐ横曾根の家の榮や洛陽の、卅三間御堂の數矢是を始て今の世迄通
矢數當りの矢數、万々歳の弦かけて納る、矢とそめでたけれ

寶曆拾歲庚辰臘月十一日

三十三間堂
平太郎緑起 祇園女御九重錦 終

明治廿六年三月五日印刷
明治廿六年三月 日出版

發翻行刻者兼
內藤加我

日本橋區新和泉町一番地

印 刷 者
瀧 川 三 代 太 郎

發兌金 櫻 堂

日本橋區通四丁目四番地

